

平成 2 8 年 度

研究紀要

第 1 2 号

秋田県立横手清陵学院
中学校・高等学校

H 2 8 研究紀要（第 1 2 号） 目次

1 研究授業および校内研修の記録

（1）中学校指導主事訪問（数学、英語、音楽、国語）

指導主事計画訪問・・・	1
佐々木 公・・・・・・	2
加賀 直子・・・・・・	8
三浦 紀子・・・・・・	13
芦沢 雅子・・・・・・	17

（2）高校指導主事訪問（国語、理科、家庭、工業）

指導主事訪問要項・・・	21
山本 博史・・・・・・	23
松田 義徳・・・・・・	26
糸井 周子・・・・・・	29
高橋 純一・・・・・・	32

2 探究活動について

瀬々 將吏・・・・・・	35
-------------	----

3 校外研修の記録

（1）教員派遣研修

成田 忍・・・・・・	39
鎌田 正樹・・・・・・	40

（2）道徳教育指導者要請研修

山本 博史・・・・・・	41
-------------	----

（3）秋田県学校体育研究大会

神谷 忠昭・・・・・・	45
-------------	----

4 年次研修の記録

（1）高等学校 5 年経験者研修

渡辺 真・・・・・・	51
------------	----

1 研究授業および校内研修の記録

(1) 中学校指導主事訪問

数学、英語、音楽、国語

(2) 高校指導主事訪問研究授業

国語、理科、家庭、工業

平成 28 年度 指導主事計画訪問

研修会テーマ

豊かな関わりの中で主体的に問題を解決する授業はどうあればよいか

1 期 日 平成 28 年 9 月 9 日 (金)

教 科 数学科

指導者 南教育事務所仙北出張所

指導主事 大阪 瑞穂 先生

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
5	3 年 B 組	3 年 B 組 教 室	数 学 基礎コース	関数 $y = ax^2$	佐々木 公

2 期 日 平成 28 年 10 月 28 日 (金)

教 科 外国語科 (英語)

指導者 南教育事務所雄勝出張所

指導主事 伊藤 文子 先生

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
5	2 年 B 組	2 年 B 組 教 室	英 語	Presentation 町紹介 (東京書籍 NEW HORIZON English Course 2)	加賀 直子 佐藤 梨奈

3 期 日 平成 28 年 12 月 7 日 (水)

教 科 音楽科

指導者 南教育事務所仙北出張所

指導主事 佐藤 敦 先生

校時	学級	場 所	教 科 等	題 材 名	授業者
2	2 年 A 組	音楽室	音 楽	和音の音を使って旋律を作ろう 〈参考曲〉カノン (パッヘルベル作曲)	三浦 紀子

4 期 日 平成 28 年 12 月 15 日 (木)

教 科 国語科

指導者 南教育事務所

指導主事 小坂 浩一 先生

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
5	1 年 B 組	1 年 B 組 教 室	国 語	さまざまな「つながり」を考えよう 中心教材『幻の魚は生きていた』(光村図書)	芦沢 雅子

第3学年 数学科学習指導案

指導者 佐々木 公

1 単元名 関数 $y = ax^2$

2 目 標

(1) 具体的な事象の中から関数 $y = ax^2$ などの関係にある 2 量を取り出し、それらを表、式、グラフを用いて表すことで、事象の様子を数学的に見たり考えたりしようとする。

【数学への関心・意欲・態度】

(2) 関数 $y = ax^2$ などについての基本的な知識や技能を活用して、考察したことがらを論理的に表現することができる。

【数学的な見方や考え方】

(3) 関数 $y = ax^2$ などの関係を、表、式、グラフを用いて表現することができる。

【数学的な技能】

(4) 身の回りの事象の中に 2 乗に比例する関係やその他の関数関係があることを理解したり、関数 $y = ax^2$ などについて、表、式、グラフを相互に関連付けて理解したりすることができる。

【数量や図形などについての知識・理解】

3 単元と生徒

(1) 単元について

本単元で扱う学習内容は、学習指導要領には次のように位置付けられている。

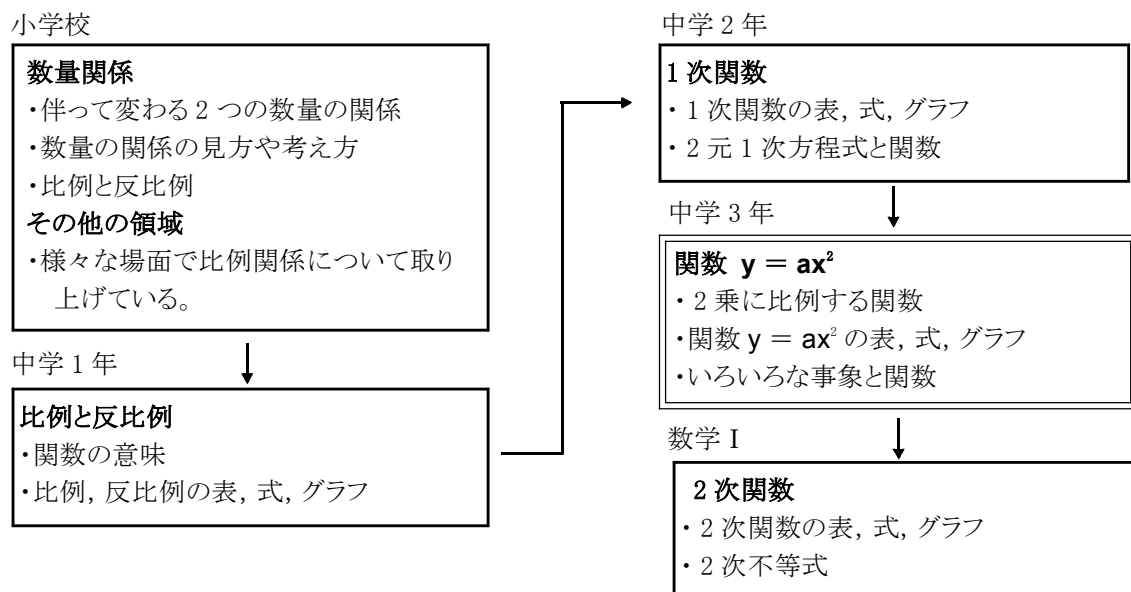
第3学年 C 関数

(1) 具体的な事象の中から二つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、関数 $y = ax^2$ について理解するとともに関数関係を見いだし表現し考察する能力を伸ばす。

生徒は小学校において、数量関係領域で比例と反比例を、また、その他の領域においてもいろいろな 2 組の数や量の値を関数の考えを用いて考察する学習をしてきている。特に比例関係は量の計算の基礎をなす重要な関係であり、比例関係を用いる学習内容は、教科書の中でも頻繁に取り上げられている。中学校 1 年生においては、まず関数の意味について学び、比例に関しては具体的な量だけでなく、数値同士に対応から比例定数を求めて式に表したり、座標の考えによって関係をグラフに表したりする学習を行っている。中学校 2 年生では一様な変化を表す 1 次関数について、変化の割合の意味や 1 次方程式とグラフの関係について学習している。

本単元では、2 次関数の基礎となる 2 乗に比例する関数について、関係を表、式、グラフで表し、それらを相互に関連付けて考察することで関数についての理解をより深めることができるものと考えられる。

【関数に関する系統】



(2) 生徒について（基礎コース）

3年生では、習熟度によるコース別学習を実施している。基礎コースには、既習内容の定着度が低かったり、数学に対する自信のなさからなかなか自分の考えを述べるができなかったりする生徒が多い。そこで、間違えた問題やわからなかった問題を、なぜ間違えたのか、どこがわからなかったのか、どうすればよかったのかについて全員が共有する授業を進めてきた。その結果、自ら質問したり、自分の考えを述べていることが徐々にできるようになってきている。

本単元に関わるレディネステストの結果は次の通りである。

番号	問題のねらい	正答率(%)
①	比例の定義を説明することができる。	76
②	比例の対応表から関係を式で表すことができる。	59
③	1次関数の対応表から関係を式で表すことができる。	24
④	1組の x , y の値の組から比例の式をつくることができる。	71
⑤	1次関数の変化の割合を求めることができる。	18
⑥	1次関数で x の変域に対応した y の変域を求めることができる。	24

日常生活の中で用いられることの多い比例関係については比較的正答率が高いものの、1次関数については学習内容の定着が非常に低い状態にある。また、正答とみなした比例の定義についても、「一方の数が2倍、3倍」、「2倍、3倍に増えると」など、比例関係や倍の考えについての誤った概念形成が見られる。生徒にとって関数の考え方は難しい内容ではあるが、特に1次関数の変化の割合についての正答率が非常に低く、その意味理解がほとんどできていない状態にある。そのため、授業ではできるだけ具体的な事象を取り上げ、対応表を中心に変化の割合や変域の意味を、具体例と比較しながら理解を深められるように工夫する必要があると考える。

(3) 指導について

これまで関数について、表、式、グラフを相互に関連付けて理解するよう学習を進めてきているが、数学を苦手とする生徒にとってはなかなか関連付けて理解することができておらず、特に 数と数との対応関係を式で表すことに難儀する生徒が多い。そこで、本単元ではいろいろな関数の考えを、対応表を中心に据えて学習を進めていくことにする。まず、具体的な事象から 2 つの量を取り出し、対応表からそれらの変化のしかたがどのように対応しているのか、規則性をみつけていく。そして、生徒自身が発見した規則から式をつくっていくことで、表と式を関連付けて理解させる。次に表からグラフをかかせ、グラフの形が x^2 の係数によって変わることやグラフの開き具合が変化のしかたの大小と関係していることを理解させる。さらに、この変化のしかたを平均変化率で表すことになるが、単に求め方を理解させるのではなく、式から表をつくり、増加量の対応から平均変化率を求めさせるようにする。この一連の考え方によって、本単元の学習だけでなく、生徒が苦手とする 1 次関数の復習にもつながるものとする。

本コースは数学を苦手とする生徒が多いため、学習問題については数値とイメージを結びつけやすくなるよう、具体的な場面設定として球が斜面を転がる場面をできるだけ多く取り入れることにする。課題とまとめについてはできるだけコンパクトな文章にするよう心がけることで、“なるほど”、“わかった”を実感させるようにしたい。また、例えば対応表の見方については、量と量の変化のしかたの対応、数と数の変化や対応のしかた、変化のしかたを増加量でとらえるか比でとらえるか等いろいろな見方がある。生徒からあげられた、それらの見方を検討したり、互いに考え方を伝える・理解する活動を通じて、一人一人の理解を深めていきたい。そのために 3 ～ 4 人のグループをつくり、各自の考えを述べたり、他者の考えを説明したりする活動を充実させていきたい。まとめの段階では、キーワードを板書することによって、生徒からのねらいに迫ることばを引き出すとともに、必要に応じて次時の課題につなげていきたい。

4 単元の全体計画(本時1/13)

時	学習活動	評価規準	観点
1 ・ 2	①球が斜面を転がる様子から、2 乗に比例する関係について知る。(本時)	① 2 乗に比例する関係をもとにして一方の量に対応するもう一方の量を求めることができる。	【知】
	②対応表の関係や 1 組の x 、 y の値の組から、 $y = ax^2$ の式を求める。	②関数 $y = ax^2$ の関係を式に表すことができる。	【技】
3 ・ 4 ・ 5	③関数 $y = x^2$ のグラフをかき、その形や特徴を調べる。	③関数 $y = x^2$ のグラフの形と特徴を理解している。	【知】
	④関数 $y = x^2$ のグラフをもとにして、 $y = 2x^2$ と $y = -2x^2$ のグラフをかき、その形や特徴を調べる。	④関数 $y = x^2$ 、 $y = 2x^2$ 、 $y = -2x^2$ のグラフを関連付けて、その特徴を考えることができる。	【考】
	⑤関数 $y = ax^2$ のグラフについて、 a の値をいろいろにとって、その特徴を調べる。	⑤関数 $y = ax^2$ のグラフについて、 a の値と関連付けて、その特徴を考えることができる。	【考】
6 ・ 7 ・ 8	⑥関数 $y = ax^2$ の値の増減について調べ、 x の変域に対応する y の変域を求める。	⑥関数 $y = ax^2$ で、 x の変域に対応する y の変域を求めることができる。	【技】
	⑦球が斜面を転がる様子から、球の平均の速さを求め、関数 $y = ax^2$ の変化の割合の特徴を調べる。	⑦具体的な事象において変化の割合の意味を考えることができる。	【考】
	⑧関数 $y = ax^2$ の変化の割合を求める。	⑧変化の割合を求めることができる。	【技】
	⑧変化の割合とグラフの関係について調べる。	⑧変化の割合は、グラフ上の 2 点を通る直線の傾きを表していることを理解できる。	【知】
9	⑨関数 $y = ax^2$ と 1 次関数の特徴を比較しながらまとめる	⑨関数 $y = ax^2$ の変化の割合を 1 次関数の変化の割合と対比させて考えることができる。	【考】
	⑨基本の問題に取り組む。	⑨関数 $y = ax^2$ の問題を表、式、グラフを用いて解決している。	【技】
10 ・ 11 ・ 12	⑩身のまわりの問題を 2 乗に比例する関係を用いて解決する。(物体の落下)	⑩具体的な事象について、関数 $y = ax^2$ の考えを活用して問題を解決することができる。	【考】
	⑪身のまわりの問題を関数 $y = ax^2$ のグラフを用いて解決する。(放物線と直線)	⑪具体的な事象について、関数 $y = ax^2$ のグラフを活用して問題を解決することができる。	【考】
	⑫身のまわりからいろいろな関数を見つけ、その変化や対応の様子を調べる。	⑫身のまわりにあるいろいろな関数に関心をもち、その変化や対応の様子を調べたり、それを利用して問題を解決しようとしている。	【関】
13	⑬章の問題に取り組む。	⑬関数 $y = ax^2$ の基本的な性質について理解している。 ⑬関数 $y = ax^2$ の考えを活用して問題を解決している。	【知】 【考】

5 本時の実際 (1/13)

(1) ねらい

具体的な事象の中から2つの量を取り出すとき、2量の対応関係に、2乗に比例する関係があることについて理解することができる。【数量や図形などについての知識・理解】

(2) 本時の展開

学習活動と予想される反応	形態	指導の留意点と評価												
1 問題を把握する。	一斉	- 学習問題をイメージしやすいよう、動画を見せてから問題を提示する。 - ボールの速さがだんだん速くなることをおさえておく。												
球が斜面を転がるとき、時間と距離の関係を測定したところ、次のようなデータが得られた。このとき、ボールは8秒で何 m 進むと考えられますか。 <table><tr><td>時間(秒)</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td></tr><tr><td>距離(m)</td><td>0</td><td>0.4</td><td>1.6</td><td>3.6</td><td>6.4</td></tr></table>			時間(秒)	0	1	2	3	4	距離(m)	0	0.4	1.6	3.6	6.4
時間(秒)	0	1	2	3	4									
距離(m)	0	0.4	1.6	3.6	6.4									
2 学習課題を確認する。		時間を与えて問題に取り組ませてみる。												
球が斜面を転がるとき、時間と距離の変化のしかたにはどのような規則性があるのだろう。														
3 各自で課題に取り組む。 ①距離が規則的に増えている。 ②距離が時間の何倍になっているのかが規則的に増えている。 ③時間を2倍すると距離は4倍、3倍すると9倍で2乗倍になっている。	個別	- 自力解決できない生徒には、「これは比例の関係なのだろうか」と補助発問する。 - 自分の見つけた規則性にしがたって、問題の解答を書かせる。 ②については、時間を何倍しても距離にならないことを押さえておく。												
4 比較・検討する (1) 距離の求め方を説明する。	グループ 一斉	- 全員が自分の解決方法を述べる機会をつくる。 3つの方法すべてについて理解できるよう、自分の解決方法以外の方法についても説明させる。												
(2) 時間の数値が与えられたとき、より少ない情報で距離の数値を求められる方法を考える。 ・③の考えだと順に計算しなくても済む。		- 比例関係との類似性に気づかせ、「2乗に比例する」という用語を導入する。 1秒ごとの距離の増加量が秒速を示していることを確認し、ボールの速さがだんだん速くなっていることを確認する。												
5 まとめる														
・ボールが斜面を転がる運動では、時間が2倍、3倍、…になると、距離が2²倍、3²倍、…になる。このとき、距離は時間の2乗に比例するという。														
6 評価問題を解き振り返りをする。	個別 一斉	2乗に比例する関係をもとにして一方の量に対応するもう一方の量を求めることができる。【数量や図形などについての知識・理解】(評価問題)												

授業研究会 記録用紙(各教科まとめ)

(数 学 科)

平成28年9月9日(金)

記録者 佐々木 公

1. 数学科研究協議

- ・話し合う活動を充実させると、どうしても時間が足りなくなってしまう。まとめを次時に行ってもよかったのではないか。
- ・解法までしっかり行っていれば、もっと評価問題も解けたはずである。
- ・「速さ一定とは？」という問いは生徒にとって非常に難しい。「時間と道のり」と言い換えたことで生徒が答えられた。
- ・話し方の指導, 特に根拠をつけて述べることを習慣づけたい。
- ・既習の内容や他の人の考え方と関連づけて話すことができていた。

〈助言 大阪瑞穂 指導主事〉

- ・生徒からは様々な考え方が出たわけだが、評価問題をどの方法で解かせるかまで考えて終末を計画するとよい。
- ・指導案に小中高の連携が書かれているのがよかった。
- ・弱いところを何とかしようとする指導, 指導案であった。
- ・生徒の考えを見取った上で発表させていた。
- ・今日のねらいをよく考え、学び合いの内容をもっと絞ってもよかった。
- ・比較・検討の場面では、生徒の考えを比較・検討する方法だけでなく、既習の内容、特に一次関数と比較・検討してみるのもよかったのではないか。

2. 全体協議

- ・自然科学の分野ではデータをどう分析するかが大切であり、今回生徒はよく分析していた。
- ・生徒にいろいろな考えを許容する形の発表をさせた上で収束させていくことで、先人たちのあゆみを追体験することができる。
- ・生徒たちに、今日学習したことをまとめさせてみてから評価問題に取り組ませたい。
- ・まとめの言葉は子供たちに話させてもよかった。

〈助言 大阪瑞穂 指導主事〉

- ・単元の全体計画の①, ②の学習活動が混在する授業になってしまった。ねらいや活動内容がより明確になるよう心がける。
- ・研究の視点にあるが、「伝え合う」で終わらないようにしたいもの。
- ・比較・検討は、何を、どのような手立てで、が明確であれば生徒からの意見を拾いやすい。
- ・目的によって学習形態を使い分けたい。
- ・グループ活動を取り入れる際には、グループ活動と全体の活動を同じにしないことが大事。

第2学年B組 外国語科学習指導案

指導者 加 賀 直 子
佐 藤 梨 奈

1 単元名 Presentation 町紹介(東京書籍 NEW HORIZON English Course 2)

2 単元の目標

- (1) 適切な文型や文章構成で、県南地域の魅力について5文以上の英文で書いて発表することができる。【外国語表現の能力】
- (2) 聞き手に分かりやすいように発表したり、発表を聞いて積極的に質問したり意見を述べたりしようとしている。【関心・意欲・態度】
- (3) 友達の発表を聞いて、内容について理解することができる。【外国語理解の能力】
- (4) 地域を紹介する言語材料やスピーチの構成に関する知識を身につけている。【言語や文化についての知識・理解】

3 生徒と単元

(1) 生徒について

男子12名、女子8名、計20名のクラスである。素直で真面目な生徒が多く、英語の時間はどの活動にも積極的に取り組んでいる。2学期に入り、接続詞(if, that, when, because)の表現を学習したことで、意見や考えを述べたり書いたりする活動に更に積極的に取り組むことができるようになってきた。しかし、与えられた文構造を用いて単文で表現する活動には積極的に取り組むことができるものの、日記やスキット、紹介文など自由度の高い、まとまった量の英文を書いたり述べている活動には苦手意識を感じている生徒が多く、手厚い支援が必要である。

今年度の授業では、日記、将来の夢、転任する先生へのメッセージ、教科書の Re-write など、まとまった文章の Writing に取り組んできた。文章構成を考えながら、既習の文型を用いたり辞書で調べたりしてスラスラ書く生徒もいるが、大半は細かい支援を必要とする状態である。対策として、文章作成に取り掛かる前に、使えそうな語句や文型の練習、マッピングでアイディア整理、モデル文の提示などを行っている。しかし、それでも時間がかかる生徒は多く、個々への支援が必要である。

本校には、常駐の ALT がおり、生徒個人の実態を把握し、授業ではきめ細かい指導をしている。そのため、多くの生徒は ALT に親しみを感じており、積極的に話しかける場面が多く見られる。また、留学生や海外生活を長く経験した高校生もおり、授業に参加してもらったり体験談を聞いたりするなかで英語に親しみを感じている生徒は多い。年度途中からはオーストラリア出身の高校1年生の体験入学生にも週に1度授業に参加してもらっているが、対話活動などで気軽にやりとりしている様子が見られる。

(2) 単元について

中学校学習指導要領外国語編では、「書くこと」の言語活動として、「(オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。」という項目がある。具体的には、接続詞 (because, that, if, when) や、so, then, for example などを用いて、文と文に関連性をもたせること、全体の構成に一貫性があり、読み手を意識して論理的に分かりやすく伝えることが大切である。

本単元では、「自然」「建物」「祭り」「食べ物」など、自分の町について紹介したい話題の例を複数示すことで、同じ町のことでも様々な観点から紹介できるようになっている。単元の最終目標として、12月にオーストラリアに帰国予定の体験入学生に贈るという目的で地域の紹介文を書く予定である。海外の人に向けて地元の魅力について書いたり、学級で原稿の発表会を行ったりするなかで、自分の地域を英語で発信することへの関心を高めることができる格好の単元と言える。更に、前の単元で学習した There is/are~.をはじめ、動名詞、助動詞、接続詞などを駆使して地域の魅力についてより具体的に表すことができるため、文法事項や文章構成についての知識の習得もねらう

ことができる。教科書のモデル文だけでなく、ALT、体験入学生生の例文なども紹介し合い、inputの量を増やしながら表現、理解、そして知識・理解の観点からも生徒の成長が期待できる単元である。

(3) 指導について

本校の研究主題は、「問題を発見し、豊かな関わりの中で主体的に問題を解決しようとする生徒の育成」である。重点目標として、「(1) 生徒の探究心・問題解決能力を高める工夫、(2) 豊かで質の高い思考を支える言語活動の充実」を掲げている。英語科では、「話す」「聞く」「読む」「書く」の4技能を統合的に活用しながら「豊かに関わり」、その過程で互いに「主体的に問題を解決しようとする」雰囲気作りや場面設定に努めていきたいと考えている。

これまでの自由英作文の活動からは、大きく次の3点が反省点として挙げられる。1つ目は、動機付けの弱さである。「友達の前で発表する」、あるいは「英文を掲示する」といった最終ゴールは、特に苦手な生徒にとっては、かえって活動に対する意欲を薄れさせてしまうことさえあった。英語で伝えることの楽しさを実感できるゴールを設定していく必要性を感じている。2つ目は、提示したモデル文のバリエーション不足である。そのため、生徒の作文が単調になり、「自分の表現したいことを書いた」、という達成感を味わわずに発表させてしまったことがあった。例えば、「将来の夢」の締めくくりの文では、**To be a good ~, I study ~.**という文を使う生徒が多く、原稿交換や発表会では互いの工夫から学ぶことができない現状であった。3つ目は、文型や文章構成の知識が定着していないまま書き始めた生徒が見受けられ、この活動を他の場面で応用することができない様子が多く見られたということである。これらの3つの反省を生かしながら、次の3つの点を本単元の指導の柱としたい。

①「自分たちの地域紹介をする」という活動への動機付け

ALTや体験入学生だけでなく、留学経験のある高校3年生にもモデル文を書いてもらい、興味を引きつける。また、単元全体のゴールを早い段階で提示し明確な目的意識をもたせることで、使えるような表現の練習や、英作文の活動に意欲的に取り組ませていきたい。

②モデル文の提示

英語の授業において、本校の重点目標(2)にある「豊かで質の高い思考を支える言語活動」は、生徒に提示されるモデル文の質と量に大きく左右される。多様なモデル文を例示し、**There is/are ~. You can enjoy ~ there.**など使えるパターンはもちろん、文章全体の構成の工夫にも着目させたい。また、秋田県教育委員会で発行した「ふるさと紹介ハンドブック」からも例文を提示し、参考パターンを多く与えていきたい。

③文型や文章構成の知識の定着

文型が定着していないまま書き始めると、部分的な単語のみを変えただけの文章となり、オリジナリティに欠けるだけでなく、自己表現の楽しさを味わえずに終わってしまうことがある。町の紹介に使える表現を**Warm-up**の帯活動で繰り返し練習させたり、TTによるきめ細かい指導のもと、モデル文の吟味を行わせながら文章構成の知識を体得させたりして、単元全体のゴールにたどり着けるように学習形態を工夫していきたい。特に、モデル文を読む際には、ジグソー学習により自分たちが書く際に使えるような文を互いに分析し、主体的な学びをするなかで重点目標の(1)「生徒の探究心・問題解決能力を高める」指導ができるのでは、と考える。

モデル文を受け身で読むのではなく、自分が書く際に使えるような表現を学ぶという意識をもって読むこと、更に、地域をより魅力的に紹介するには、と試行錯誤しながら書き進めることなど、単元全体を通して生徒がアクティブラーニングを実践できるように指導していきたい。

本校は中高一貫校のため、**Can-do** リストは中学校1年生から高校3年生、さらに上級のレベルまでの指標が書かれた特色あるものとなっている。高校で学ぶ英語の基礎が現在の学習内容であることを意識させていくなど、リストを十分に活用していく必要がある。今回の単元のメインとなる**Writing**を取りあげると、高校ではより難しい話題を、より長い文章で書くことが必要とされるため、構成や接続詞が中学校以上に重要な要素となる。また、中高の英語科教員が互いの授業に乗り入れ指導を行っているが、高校での**Writing**でも上記で述べたことが課題として挙げられる。中学校、高校双方の教師側も、早い段階から本校の**Can-do** リストを意識して継続的に指導していくことが大切である。

4 単現の指導・評価計画 (総時数 6時間 本時2/6)

題材・話題	時数	ねらい	学習活動	評価規準	努力を要する生徒への手立て
Hop	1	教科書のモデル文の内容を理解する。	教科書やモデル文を読み、大切な語句や文を確認する。質問に答えながら内容について理解していく。	- モデル文についての質問に適切に答えることができる。 【理解】(ワーク) - 方角や famous for~, There is/are~ など重要な言語材料や、全体の文章構成についての知識がある。【知識・理解】(ワークシート)	- ペアワークに教師も参加して、ヒントを与える。 - 視覚的に文法や語句、「始まり、具体例、結び」の文章構成が分かりやすいように、板書を工夫する。
	2 本時	ALT や留学生などのモデル文を読み、大切な語句や表現を用いて Re-telling することができる。	ジグソー学習を通して、それぞれのモデル文の大切な語句や表現に注意しながら、互いに Re-telling し合う。	- 大切な語句や表現を使いながら、自分が担当したモデル文を相手に伝えるように Re-telling することができる。 【表現】(観察・振り返り)	自分のグループに戻った時にしっかりと発表できるよう、一緒に発音しながら、励ます。また、特に使えそうな表現を強調する。
Step	3	県南地域について、カテゴリー別に Small Write に取り掛かる。	帰国予定の体験入学生に送るという目的で、紹介したい内容のメモシートを完成させる。	- メモシートのマッピングに語句をまとめる。また、前時のワークシートを参考に短文を書くことができる。【表現】(メモシート) - 友達と協力しながら、積極的に県南の魅力を発見しようとしている。【関心・意欲・態度】(観察)	- 前時に使ったワークシートや板書で表現の仕方について復習する。 - 他の班のアイデアを紹介し、なるべく具体的に書くように促す。
	4	県南地域の魅力を紹介する原稿を書く。	Small Write で作成したメモやモデル文を参考にしながら原稿を書く。	適切な文型や文章構成で5文以上で書くことができる。【表現】(ワークシート)	- 前時のワークシートや板書で文章構成についての復習をする。 - 机間指導を行いながらヒントを与え、支援する。
Jump	5	原稿の暗唱練習をする。	原稿を何度も音読練習し、暗唱する。	- 発音をしっかりと確認しながら積極的に暗唱に取り組んでいる。【関心・意欲・態度】(観察・振り返り) - 内容が伝わるような音読をしている。【表現】(観察)	- 机間指導を行いながら、ともに音読しながら支援する。 - 身振り手振りを交えて言えるように促す。
	6	発表会で暗唱したり、友達に質問したりする。	友達の前で写真などを用いて発表する。また、友達の発表に対して質問する。	- 聞き手に分かりやすいように発表したり、発表を聞いて積極的に質問したり意見を述べたりしている。 【関心・意欲・態度】(ワークシート・観察) - 友達の発表を聞いて、内容について理解することができる。 【理解の能力】(振り返り・観察)	- 難しい内容には簡単な説明を事前に加える。 - 発表後に原稿を交換し、質問文やコメントを書かせる。

5 本時の学習（本時 2／6）

（1）ねらい

- ・ALTや留学生などのモデル文を読み、大切な語句や表現を用いて Re-telling することができる。

【外国語表現の能力】

（2）学習過程 【AL】:アクティブ・ラーニング

学習活動	時間	教師の支援・評価		資料等
		JTE	T2, 体験入学生	
1 Practice basic drill sheet	5	・机間指導をして、全員が interaction に参加できるように支援する。		Basic drill sheet
2 Exchange ideas 2 グループに別れ、自分の意見を発表させる。	5	・進んで自分のアイディアを発表するよう促す。		
3 Check today's goals and procedures 今日のめあての確認	3	・今日のめあてで“Let's introduce models in the group. You are mini-teachers!”を提示し、流れや目的をわかりやすく説明する。 ・単元全体を見通して、今回の活動にどのような意義があるか伝える。 ・次の時間から自分たちが書き始めることを伝え、目的意識をもって活動に取り組むよう励ます。		
4 Review each model's important points and practice re-telling ・地域紹介に使える表現や大切な語句の復習を行う。 ・「祭り」「建物」「食べ物」「自然」の担当ごとに別れ、音読や Re-telling の練習を行う。 【AL】	22	・前時の活動を思い出ししながら、地域紹介で使える言語材料の復習をさせる。文章構成では、特に「始まり、具体例、結び」の構成には特に注意を払わせる。 ・それぞれの担当に責任をもって取り組むよう励ます。 ・生徒の様子を注意深く見ながら、Re-telling する際の大切なポイントを説明する。 ・良い例や、つまりく傾向のある箇所を紹介し、全体で共有する。		Work-sheet
5 Re-tell the content of the models ・班に戻り、モデル文の内容を伝える。 【AL】	10	・机間指導をして、つまりくいている生徒に支援する。 ・聞いている生徒は大切な箇所をメモするなどして注意深く聞くように促す。 ・大切な語句や表現を用いて、自分が担当した文章の内容が相手に伝わるように Re-telling することができる。 【表現の能力】（観察・自己評価）		Work-sheet
6 Self evaluation	5	・Re-telling した内容を3分間で書かせる。 ・次時の活動を伝えるとともに、授業を振り返って自己評価をさせる。		

第2学年B組 外国語科研究協議記録

記録者 加 賀 直 子

1 英語科研究協議

授業者より	• Re-telling というゴールを設定することが、読むことへの動機付けとなり、生徒たちの「自ら読もうとする姿」が見られた。 • 今年度、表現活動の中に、従来行っていた自己表現の Writing、Speaking test、Presentation、音読などの他に、Re-telling, Re-writing を何度か取り入れた。そうすることで教科書の内容を理解し、教科書の内容を自分の言葉で伝えようとする意欲が見られるようになった。 • 課題としては、フィードバックをどうすればいいのかまだあやふやなところがある、ということである。
英語科教員からの感想など	• 伝える、という活動のために、読んでいた。→じっくりと読み、内容をしっかり理解しようとする様子がうかがえた。 • 活動としては、「読む」（内容理解する）活動か、それとも「表現する」活動なのか？ • Unit のゴールと、今日の Goal と、どうつながっていたか。 • 統合的な活動であった。これがアクティブラーニングにつながるのでは。 • 大事な部分をメモしながら読み取っていた。 • 生徒たちは積極的に頑張っていた。「発表する人は立つ」「聞く人は、立って発表する人にしっかり体を向ける」など、役割をはっきりさせることで、コミュニケーションにとって大切な「声の大きさ、アイコンタクト」などが自然にできているのではないだろうか。
指導主事より	適切なフィードバックがなければ、生徒の表現力は伸びない。今日の活動が「頑張った」だけで終わらないように、個々の生徒に適切なフィードバックをすることが必要である。 例) ・～という表現をもう少し多く使うとわかりやすくなる。 ・～さんのように、～という文を入れることでより詳しい内容になる。 また、聞いている人は、聞きながら質問を一つすることで、発表者の Re-telling により注意して聞き入ることができる。

2 全体研修会

各班からのまとめ	• 見通しをもって取り組める授業であった。 • 主体的・対話的な学びを成立させるための学習展開＝AL • 能動的＝脳動（働）的！
指導主事より	4 技能の統合とは、「目、耳、手、頭をフルに使う」活動、とも言える。今日の授業では、主体的に学ぼうとする手立てがしっかりと考えられていた。 AL（アクティブラーニング）自体が目的ではなく、更に学ぼうとする主体性が目的である。小学校、中学校、高校の英語学習の接続は適切か、これまでの学びが生かされているか、探求しながら、「子どもたちの気づき、問い、発見」を伸ばしていただきたい。

2年A組 音楽科学習指導案

指導者 三浦 紀子

- 1 題材名 和音の音を使って旋律をつくろう
＜参考曲＞ カノン（パッヘルベル作曲）

2 目 標

- (1) 和音とその進行の特徴，長調の音階の特徴に関心をもち，それらを生かし音楽表現を工夫して旋律をつくろうとしている。【音楽への関心・意欲・態度】
- (2) 和音とその進行の特徴，長調の音階の特徴を生かした音のつながり方を工夫し，どのように旋律をつくるかについて思いや意図を持っている。【音楽表現の創意工夫】
- (3) 和音とその進行の特徴，長調の音階の特徴を生かした音楽表現をするために，課題に沿った音の組合せ方，記譜の仕方などの技能を身に付けて旋律をつくっている。【音楽表現の技能】

3 生徒と題材

(1) 生徒について

男子 12 名，女子 7 名，計 19 名の明るく元気な生徒の多い学級である。中には歌唱やリコーダー一等の実技表現に苦手意識のある生徒もいるが，授業で出会う新しい音楽に積極的に挑戦し，楽しもうとする生徒が多いので，今回初めて取り上げる創作にも意欲的に取り組むことが期待できる。

ただし，これまでの表現活動（歌唱・リコーダー）においては，楽譜からリズムや音程等を読み取るのではなく，教師や友人等の演奏を聴き取ることに頼る生徒が多い。

(2) 題材について

本題材は，学習指導要領の内容「A 表現（3）創作のA 言葉や音階などの特徴を感じ取り，表現を工夫して旋律をつくること」および共通事項（1）のA「旋律」の要素と関連する学習である。参考曲『カノン』は，一定の和音と低音の動きが繰り返される中で旋律が変化していくため，音楽の構成が聴き取りやすい。また，長音階の特徴を生かした旋律が展開されており，生徒が創作活動に取り組む際の参考曲としてふさわしい作品である。

(3) 確かな学力を身に付けさせるための具体的方策

歌唱教材や合唱に対しては，旋律と伴奏の関係に注目させることで楽曲の構成をとらえ，表現することや聴くことへの関心を高め，作曲者の意図や楽曲の特徴の発見につなげたいと考え取り組んできた。今回の創作活動では，自分の思いや意図を込めた楽譜をつくることで，読譜力を向上させていきたい。さらに生徒同士が学び合い，主体的に創作活動に取り組むことができるよう，次のような手立てを講じながら指導したい。

- ・旋律の流れ，音程の高低を図形的に視覚化する。
- ・リコーダーを使用し，自分のつくった旋律を演奏・確認しながら作曲させる。
- ・2～3人のグループ活動とし，話し合いながら旋律を工夫させる。
- ・生徒の意図どおりの旋律の音のつながり方になっているか，教師の伴奏で途中確認をする。

4 全体計画（総時数3時間）

評価 規 準	① 音楽への関心・意欲・態度	② 音楽表現の創意工夫	③ 音楽表現の技能
	和音とその進行の特徴、長調の音階の特徴に関心をもち、それらを生かし音楽表現を工夫して旋律をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	音のつながり方を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、和音とその進行の特徴、長調の音階の特徴を生かした音楽表現を工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。	和音とその進行の特徴、長調の音階の特徴を生かした音楽表現をするために必要な課題に沿った音の組合せ方、記譜の仕方などの技能を身に付けて旋律をつくっている。

時	ねらい	主な学習活動	思考力・判断力・表現力等を育てる方策	評価規準【評価方法】
1 本 時	・和音とその進行の特徴、長調の音階の特徴に関心をもち、それらを生かした旋律をつくる学習に主体的に取り組むことができる。	・課題の「和音と低音」および『カノン』を聴き、和音の音の重なりや進行の特徴・雰囲気および旋律の特徴について気づいたことについて話し合い、作品づくりのイメージを持つ。 ・和音に含まれる音を用いて、音のつながり方を工夫しながら旋律を学習プリントに記入する。	・課題の中の和音、低音それぞれの動きに注目することで和音進行の特徴をとらえさせる。 ・『カノン』の旋律が音階の順次進行であることから、跳躍との印象の違いを比較することで、音のつながり方によって旋律の雰囲気が変わることにつかせる。 ・一人一人が作品をつくり、次時のグループ活動に思いや意図をもって参加できるようにする。 ・生徒の作品を2～3紹介し、音のつながり方によって旋律の印象が変わることを感じ取らせる。	評価規準①② 【観察, 学習プリント】
2	・音のつながり方を知覚し、その特質や雰囲気を感じながら、どのように旋律をつくるかについて思いや意図を持って取り組むことができる。	・前時の作品を基に、様々な音のつながり方を試しながら旋律をつくる。 ・話し合いや演奏をしながら、自分たちの思いや意図に合う作品になるように改良して学習プリントに記入する。	・2～3人のグループで課題に取り組ませる。 ・キーボードやアルトリコーダーで自分たちのつくった旋律を確認しながら作曲する。	評価規準②③ 【観察, 学習プリント】
3	・和音とその進行の特徴、長調の音階の特徴を生かした音楽表現をするために必要な課題に沿った音の組合せ方、記譜の仕方などの技能を身に付けて旋律をつくることができる。	・作品を清書し、リコーダー演奏でグループごとに発表する。 ・学習を振り返り、気づいたことや感じたこと、学んだことを文章にまとめる。	・作品の意図に合った演奏となるように表現（音色等）を工夫させる。 ・教師の弾く「和音と低音」に合わせて、グループごとにつくった作品をリレーし、グループごとに発表する。	評価規準③ 【観察, 学習プリント】

5 本時の学習（1／3時間）

（1）ねらい 和音とその進行の特徴、長調の音階の特徴に関心をもち、思いや意図をもって旋律をつくることができる。

（2）本時のねらいを達成するために

・和音とその進行の特徴、長調の音階の特徴を知覚できるよう、楽譜を見ながら和音・低音・旋律の動きの特徴をとらえさせる。

（3）学習過程

時間 (分)	学習活動	形態	指導と支援	○評価規準〔評価方法〕【観点】 ☆努力を要する生徒への手立て
6	1. 『カノン』の冒頭部分を聴く。	一斉	・旋律と和音、低音の3つのパートに注目させる。	○和音とその進行の特徴、長調の音階の特徴に関心をもち、それらを生かし音楽表現を工夫した旋律をつくっている。 〔観察, 学習プリント〕 【評価規準①②】 ☆図示した旋律を聴き取ることで旋律の特徴をとらえさせる。
2	2. 本時の学習のめあてを確認する。	一斉	・『カノン』の旋律の動きが長音階による順次進行であることに気づかせる。 ・本時の見通しを持たせる。	
	和音の音を使って心地よい旋律をつくろう			
8	3. 和音や低音の動きに着目して「和音と低音」を聴き、感じたことや気付いたことを発表する。	個 一斉	・課題の中の和音、低音それぞれの動きに注目することで和音進行の特徴をとらえさせる。	
15	4. 和音に含まれる音を用いて旋律をつくり、学習プリントに記入する。	個 一斉	・リコーダーで演奏しながら、パズル感覚で自由につくらせる。 ・生徒同士で交流しながら活動させる。	
15	5. 発表された作品を聴いて、旋律の印象の違いについて話し合う。	一斉	・生徒の作品を2～3取り上げ、旋律を黒板に図形的に示す。その際、生徒が旋律を歌い、教師が和音と低音を伴奏する。音のつながり方によって作品の印象が変わることを感じ取らせる。	
3	6. 今日の学習を振り返り、次時の見通しをもつ。	一斉	・音のつながり方を工夫して、グループ活動で旋律をつくっていくことを知らせる。	

第2学年A組 音楽科研究協議記録

記録者 三 浦 紀 子

1 全体協議

授業者より	・旋律をパズル感覚でつくる段階で授業を設定していたが、明確な意図を持って旋律をつくることのできる生徒がいたことで、その作品をつかって音高の動きによる旋律の表情の違いをとらえさせることができた。 ・リコーダーを使うのが半年ぶりで運指を忘れている生徒も多く、旋律の確認に時間がかかってしまった。
参観者からの感想など	・五線黒板に音名を貼り付け、同じ様式のプリントを使って気軽に旋律をつくる形式にしたことで、楽譜になじみのない生徒も抵抗感なく創作や改善に取り組むことができた。 ・五線黒板に音名を貼り付けたことで音の動きが明確になり、聴覚と視覚を使って旋律をとらえることができた。 ・リコーダーで旋律を確認する際、一人で音を出すだけでなく、近くの生徒同士で音を確認し合い、楽器演奏が得意な生徒がミニティーチャーの役割を果たすこともできたのではないかな。 ・授業後半で、2種類の旋律を取り上げたことで、旋律の音高の動きによって、旋律の性格や表情が変化することを生徒が感じ取ることができたのではないかな。創作した生徒自身が、旋律をつくった意図をきちんと説明することができたのも良かった。 ・リコーダーの運指を思い出すのに時間がかかる生徒もいたので、運指を全体で確認する時間を設定した方が効率良くなったのではないかな。
指導主事より	・「めあて」の提示が一方的に説明する形になってしまった。「カノン」を用いて旋律・和音・低音の役割を確認する部分は良いが、その後生徒が能動的に学習に取り組めるような流れをつくると良い。教師が長々と説明するよりも、違和感を持たせて生徒の気づきを引き出すと、ルールの説明が少なくて済む。 ・旋律の性格や表情をより明確にとらえさせるには、旋律の音符の流れを線でつないで動作化すると良い（ユニバーサルデザイン）。 ・生徒全員が思いや意図を持って創作活動に取り組む、ということが今回の大事なポイントである。旋律に対して感じたものを書かせたり、「本時のめあて」について、振り返りができたか書かせたりする時間を設定した方が良い。

第1学年B組 国語科学習指導案

指導者 芦沢 雅子

1 単元名 さまざまな「つながり」を考えよう

中心教材『幻の魚は生きていた』（光村図書）

2 目標

- (1) 『幻の魚は生きていた』を読み、文章の内容や筆者の考えに触れ、人間の生活と生き物との関係について考えを深めようとする。【関心・意欲・態度】
- (2) 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつことができる。【C読むこと(1)エ】
- (3) 筆者の考えをもとに、人間の生活と生き物や環境との関係について考えを深めることができる。【C読むこと(1)オ】
- (4) 説明文を読み進める上で必要な語句について理解することができる。【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ウ)】

3 生徒と単元

(1) 生徒について

男子 20 名、女子 12 名計 32 名の学級である。中学校 1 年生の説明的文章『ちょっと立ち止まって』『ダイコンは大きな根?』の学習で、生徒たちは文章の内容に大いに興味を持ち、段落の役割、構成の工夫について意欲的に学習していた。しかし、学習で読み取った内容を用いて書く活動においては、「自分なりの体験・具体例の引用」を条件としたところ、第一段階で的確に条件を入れて書くことができた生徒は 32 名中 5 名であった。その後の学び合いで 5 名の生徒の例を聞き、その他の生徒は文章を改善できたが、この学習から、学んだことを自分の生活のさまざまな事象に照らし合わせて考えることに課題を見出した。

教科融合問題が出題される「新学力テスト（ベネッセ）」の結果を見ても、事象をつなげて考える力や条件を複合的に捉えて読み取ったり書いたりする力は不十分な生徒が多い。

(2) 単元について

『幻の魚は生きていた』は、秋田県田沢湖にかつて生息していた「クニマス」が発見されたニュースに始まり、「クニマス」が田沢湖から消滅した理由、山梨県西湖で発見された経緯、それに関わる人々の思いを綴りながら、人間の生活と生き物や環境との関係について筆者が主張を述べる文章である。それぞれの段落の役割が明確であるだけでなく、具体的な表現と抽象的な表現が効果的に用いられており、わかりやすく構成されている。また、図表や資料を適切に用いて、読者が理解しやすいよう工夫されている。

クニマスを巡る問題は、郷土の身近な問題として興味をもちやすい。しかし、その一方で複雑な社会的背景、歴史的背景が絡んでおり、さまざまな視点から考えることができる問題である。

表現上、論理的文章を読んだり書いたりするために重要な語句が多く含まれる。これらの語句について、内容を読み取る過程で正しく理解し、語彙を増やすことが期待できる。

(3) 指導について

筆者の意見とそれを支える事実とのつながりを捉えたり、中心となる文から問いの答えや主張を捉えるだけでなく、表現の特徴に着目させ、自分の表現に生かす学びを見つけさせる。『幻の魚は生きていた』という題名には「クニマス」を取り巻く人々や筆者の強い思いや感動が込められている。文章中のキーワードや文末表現にも、筆者の思いが反映されている。それらを正確に読み取らせ、その表現の工夫について考えさせたい。

また、「具体的な表現」と「抽象的な表現」の違いとよさを理解し、実感させることで、表現する力の向上につなげていきたい。特に抽象的な思考を表現するための語彙の必要性を実感することが、論理的な文章を読み取ったり書いたりする力に結びつくと考える。「酸性」等理科的な語句や、「クニマス」についての基礎的な知識に関する語句・資料に関しては、理科の時間や映像の資料などを参考にし、理解しやすいようにしていく。このような学習を総合的な学習のテーマ「環境学」における個々の探究に生かし、小論文の作成をすることになっている。この活動に並行し、学年の課題図書として環境に関する本を 8 冊提示して読ませている。これらの学習が人間の生活と生き物や環境との関係について考えを深め、多面的に自分の思いを述べる力をつけることに生きるであろう。

4 全体計画（全7時間）

評価規準

国語への関心意欲態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
『幻の魚は生きていた』を読み，文章の内容や筆者の考えに触れ，人間の生活と生き物との関係について考えを深めようとしている。	- 文章の構成や表現の特徴について自分の考えをもっている。 【C読むこと(1)エ】 - 筆者の考えをもとに，人間の生活と生き物や環境との関係について考えを深めている。 【C読むこと(1)オ】	説明文を読み進める上で必要な語句について調べて理解している。 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ウ)】

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準【観点】
1	『幻の魚は生きていた』を読み，感想をもつ。	「クニマス」とはどのような魚か，基礎的な知識や「酸性」等の理科的な知識に関する語句は，理解を助ける資料を用意する。	【関心・意欲・態度】 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ウ)】
2	学習課題を設定し，学習の見通しをもつ。	身近な環境についてさまざまな視点を提示する作品であることに気づかせ，総合的な学習の時間のテーマである「環境学」につながる学習に向けた課題づくりをさせる。	【関心・意欲・態度】
3 本時	一つ目の問いに対応した答えを探しながら，文章の構成や表現の特徴について自分の考えをもつ。	- 問いと答えに着目させ，全体構成や表現の特徴について考えさせる。 - 段落の中心となる一文を見つけさせる。	【C読むこと(1)エ】
4	二つ目の問いとその答えを見つめながら，文章の構成や表現の特徴について自分の考えをもつ。	- 一つ目の問いと答えを見つけた学習で学んだことをもとに考えさせる。 - 筆者が説得力を高めるために工夫していることについて，これまでの学習を踏まえて考えさせる。	【C読むこと(1)エ】
5	筆者の主張を読み取り，主張を読者に伝えるための工夫を捉える。	事実と筆者の主張のつながりを読み取り，その述べ方の工夫を見つけさせる。	【C読むこと(1)エ】
6	本文を読んで理解したことや考えが深まったことを書く。	最初に書いた感想と比べ，考えが変わったところや深まったところ，広がったところを見つけさせる。	【C読むこと(1)オ】
7	書いたことを交流し合い，学んだことを今後どのように生かすか考える。	交流を通して，自分では気づかなかった視点を見つけ，自分の考えをさらに広げていけるようにする。	【C読むこと(1)オ】

5 本時（3時間/全7時間）

（1）ねらい

一つ目の問いに対応した答えを探すことで、文章の構成や表現の特徴について自分の考えをもつことができる。

【C読むこと（1）エ】

（2）学習過程

段階	学習活動	指導上の留意点・評価
導入 10	- 本文を音読する。 - ねらいの確認をする。 - 問いの文を含む形式段落と二つの問いについて確かめる。	段落読みをし、全体の構成を意識させるようにする。
展開 35	問い①「クニマスはなぜ田沢湖で絶滅したのだろうか。」の答えになる一文を探そう。	
	答えとなる文を探し、書き抜く。 なぜその文が答えになるのか、理由を考える。	
	- 一人一人考えたことをもとに、3，4人のグループで話し合う。（AL） - 理由を明確にしながら、全体に向けてグループごとに発表する。 - それぞれの理由を比べ、話し合う。（AL） - 全体での話し合いをもとに、問いに合う答えを書く。 - その答えの文が問いと合っているか少人数で交流し、確かめ合う。（AL） - 全体へ発表し、問いと答えが正しくつながっている表現を確認する。	- 一文で見つけられない生徒には段落を探すようにさせる。 - 迷っている生徒には、教科書に傍線を引かせる。 - 理由が書ける生徒には理由を書かせる。 - 理由が書けない生徒にはグループで話し合いながら考えるよう助言する。 - キーワードを使用しているか、表現の仕方が正確かお互いに助言させる。 - 問いと答えが合っていて、正確にまとめているか、全体でも確認し、個人で書いたものを見直しさせる。 - 具体的な表現と抽象的な表現のそれぞれのよさについて触れながら、使い分けを意識させるようにする。
終末 5	中心的な文やその文を含む段落の役割などに触れながら、学んだことについて振り返る。	次時の学習につなげられるよう、構成や表現のどんなところに着目すればよいか考えさせる。 具体的な表現と抽象的な表現の特徴やそのよさについて、自分の考えをもっている。 【C読むこと（1）エ】

第1学年B組 国語科研究協議記録

記録者 芦沢雅子

1 国語科研究協議より

授業者	・説明文の構造や表現の特徴について考えをもつことは主体的な学びにつながると考える。「問い」と「答え」のつながり方を分析し、話し合うことを課題とした。抽象的な「答え」の部分と、具体的な説明である「答え」の部分を区別し、そのよさやお互いを補完している「役割」を、生徒の言葉で表現させ、理解させたい。
国語科協議	・答えのとらえ方や問いのとらえ方など、文章をよく吟味し、理解しておくことが構造的理解につながる。 ・説明文の論理の構造を考えると、全体的な構造と、部分的な構造を理解させるのが難しい。 ・生徒が能動的に活動し、自分の考えを外化するアクティブラーニングを推進しなければならない。そのための手立てを吟味し、主体的な学びにつなげていきたい。
指導主事の先生から	・アクティブラーニング（能動的な学習）は、課題設定、図書環境の整備などソフト面やハード面の両面で支えていくもの。 ・授業時間は限られているが、全体から部分に戻ってもう一度段落を吟味したり、話ができなかった生徒に考えを言わせたりする時間をなんとかして作り出したい。

2 全体研修会

各班からのまとめ	・教材研究が、主体的な学びを支えると再確認した。 ・生徒に見通しをもたせるために、明確な指示と発問で学習を組み立てていきたい。 ・ユニバーサルデザインを意識した授業が今後重要になっていくだろう。
指導主事の先生から	①習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの課程が実現できているかどうか。 ②他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める対話的な学びの課程が実現できているかどうか。 ③子供たちが見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。 ①～③のことが「深い学び」につながるアクティブラーニングの視点である。

平成28年度 教育委員会指導主事学校訪問 実施要項

1 訪問日 平成28年11月11日（金）

2 訪問者 高校教育課 指導主事 野呂田義彦（商業）
 高校教育課 指導主事 能美佳央（理科）
 本荘高等学校 教育専門監 今井由香利（国語）
 秋田中央高等学校 教育専門監 浅沼和子（家庭）
 南教育事務所 指導主事 大石 照彦

3 日程

内 容	時 間	備 考
	8：45～9：30	（1校時） 通 常 授 業
	9：40～10：25	（2校時） 通 常 授 業
校長面談	10：35～11：20	（3校時） 於 校 長 室
諸表簿閲覧	11：30～12：15	（4校時） 於 会 議 室
	12：15～12：50 12：50～13：05	昼 休 み ・中学生は給食後清掃、高校生は昼食後清掃
授 業 参 観	13：10～13：55	（5校時） ・全校授業参観 金曜日6校時の授業
	13：55～14：20	研究授業準備（SHR、放課）
研 究 授 業	14：20～15：10	（6校時）研究授業50分
	15：10～15：30	SHR、放課
授業研究会	15：30～16：10	（放課後） ・グループディスカッションによる分科会形式 で実施（付箋法）
全 体 会	16：15～16：45	1ヶ月前課題、研究授業等に対しての指導主事による指導・助言

（高等学校6校時研究授業教科・授業者・授業研究会会場）

クラス	教科・科目	授 業 者	使用教室	授業研究会 会場
11（高）	家庭 基礎	糸井 周子	11組	教科研修室1
12（高）	国語 総合	山本 博史	12組	教科研修室2
13（高）	生物 基礎	松田 義徳	生物実習室	教科研修室3
14（高）	情報技術基礎	高橋 純一	14組	会 議 室

4 本校1か月前課題

「知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の改善」

5 県教委重点指導事項

- (1) 組織で取り組む授業づくりの推進
 - ・到達目標を意識した授業構成
 - ・生徒の思考を促す授業展開
 - ・評価と検証に基づいた授業改善
- (2) 「こころ 姿 振る舞い さわやか高校生運動」の推進による生徒指導の充実
 - ・さわやかな整容
 - ・さわやかな生活態度
 - ・さわやかな学習環境

6 本校における本年度の重点目標

「高い志と 探究力 人間力の育成」

- (1) 「問い」を発し、課題解決を目指す探究力の育成を通して、学ぶ意欲を持たせ、「わかる授業、魅力ある授業」の実践により、学力向上を図る。
- (2) あいさつの励行や授業・部活動を通して「品性」と「人間力」を育成し、自他の尊重と思いやりの心を育成する。
- (3) 工業系学科をもつ中高一貫教育校としての特色を最大限に生かし、教育効果を高める「中高連携」を一層推進する。

7 1 か月前課題「知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の改善」

～生徒が疑問や考えを表現し合う授業、家庭学習が生きる授業の展開～

設定の理由

- (1) 長年本校で取り組んできた「探究」は、研究の手法、情報の収集力及び発信力の育成などにおいて大きな成果を収めているが、その経験が日々の学習活動全般に十分反映されるまでには至っていない。全教科の学習に生かす取り組みを充実させたい。
 - (2) 家庭学習量の減少や学習に対するモチベーションの低下が課題となっている。学びに向かう力を育む授業改善を目指したい。
- 以上について、学校全体で組織的、継続的に取り組み、教育目標である「21世紀を主体的に生き抜く人材の育成」の実現につなげたい。

取り組みについて

- ・授業における「解説」の精選（削減）や効率化（ICT活用を含む）を図り、理解した内容を生徒が発信する機会や生徒同士のディスカッションの場をつくる。
- ・教員各自が「探究型授業を目指した言語活動の充実の目標」を設定して取り組み、1か月後に自己評価をまとめる。
- ・家庭学習の取り組みが授業での存在感、達成感、充実感につながるよう工夫し、学習サイクルの好循環化を促す。
- ・課題の量と質、他教科とのバランスなどを教科と学年が連携して検討する。

8 授業研究会

進め方

- ・あいさつ（指導主事の紹介含）
- ・全体司会主旨説明
- ・各班での研究討議
- ・各班からまとめの発表
- ・指導主事からの指導助言

国語科 学習指導案（国語総合/漢文）

日 時 平成28年11月11日（金）6校時
場 所 1年2組教室
対 象 1年2組 28名（男子15名・女子13名）
指導者 教諭 山 本 博 史
教科書 「国語総合」（第一学習社）

1 単元名 漢文編 古代の史話 完璧／十八史略（328～329ページ）

2 単元の目標と評価規準

- （目 標）・「完璧」の辞書の意味や前文から、史話の由来に迫ることができる。
・訓点、句法に従い正確に訓読し、書き下し文を的確に書くことができる。
・当時の秦と趙との関係性から、趙や藺相如の置かれた状況が理解できる。
・藺相如の言動を通し、彼の人物像が理解できる。

（評価規準）

関心・意欲・態度	話す・聞く力	書く力	読む力	知識・理解
訓点に従い熟読させ、語義や句法に留意し、秦と趙との関係を本文から正確に読み取る力が身に付いている。			・語義や句法など本文の熟読を通し、藺相如の人物像を的確にとらえる力が身に付いている。	・語義や句法など本文を根拠にし、秦の昭王が藺相如を帰国させた理由について理解を深めることができる。

3 生徒の実態

1年生の普通科のクラスである。物静かで全体的に受け身な生徒が多い。しかし、発問を工夫すると、発問の真意を汲んで意欲的に応答しようと努める姿勢も見られる。ただ、古典への定着がまだまだ不十分な生徒が少なくない。

本単元、古代の史話の読解にあたり、語義や句法に留意して訓読や熟読に努め、激しく揺れ動く時代状況の中、中国の古代人が困難な目の前の状況にどのように向き合い、かつ、打開して乗り越えていったのか読み取る契機とさせたい。

4 単元の指導と評価の計画（全 時間）

時	授業内容	学習活動における具体的評価規準	評価方法
1	・訓点や句法に従い訓読。 ・「完璧」の辞書的意味の確認と前文から時代背景の確認。	・訓点や句法に従って正確に訓読し、書き下すことができる。 ・故事の由来に興味を持ち、辞書的な意味と前文を根拠に、史話誕生背景に迫ることができる。	授業観察、音読ワークシート 発問 授業観察
2	・熟読し脚注や語義などから、第一段（前半）の内容の把握と理解。	・脚注と語義、句法に従った熟読、また、秦と趙の関係性から、藺相如の使命の困難さに迫ることができる。	発問応答 ワークシート
3	・熟読し脚注や語義などから、第二段（後半）の内容の把握と理解。	・脚注と語義、句法に従った熟読、また、藺相如の言動から彼の人物像に迫り、昭王が彼を帰国させた経緯を理解することができる。	発問応答 ワークシート
4 （本時）	・藺相如の言動、昭王の言動から、史話誕生のいきさつの確認と整理。	・藺相如の人物像、昭王が彼を帰国させた真意についての考察を深めることができる。	グループワーク 発表 ワークシート

5 本時の計画

(1) 本時のねらい

- ・「藺相如の言動を通した人物像」を根拠に、「秦の昭王が彼を帰国させた理由」についての考察を深めよう。

(2) 学習過程

【A】関心・意欲・態度 【B】話す・聞く力 【C】書く力 【D】読む力 【E】知識・理解

	学習過程	学習活動	教師の支援
			指導上の留意事項および観点別評価と具体的な支援
導入 5分	・挨拶 ・前時の学習内容の確認。 ・本時の目標の明示。 「藺相如の言動を通した人物像」から、「秦の昭王が彼を帰国させた理由」についての考察を深めよう。	・秦の昭王が藺相如を帰国させた状況を確認する。 ・本時の目標を確認する。	・整容と準備の確認後、挨拶。 ・前時の後半の場面の状況を5W1Hを参考に説明できる。 ・本時のねらいの確認。 A【ワークシート】
展開 40分	・藺相如の人物像をグループ内で発表し合い、グループの意見を集約。 ・藺相如の人物像をグループごとにミニ白板にまとめて発表。 ・秦の昭王が藺相如を帰国させた理由について、グループ内で発表し合い、グループの意見を集約。 ・秦の昭王が藺相如を帰国させた理由について、グループごとにミニ白板にまとめて発表。	・本文の表現に着目させ、藺相如の人物像について、意見の根拠を本文に求め、意見を整理し集約する。 ・各グループの集約した意見の概要を、本文の表現を根拠として明確に示し、簡潔にまとめ発表する。 ・本文の表現に着目させ、秦の昭王が藺相如を帰国させた理由について、意見の根拠を本文に求め、意見を整理し集約する。 ・各グループの集約した意見の概要を、本文の表現を根拠として明確に示し、何を読み取ることが可能か念頭簡潔にまとめ発表する。	・本文の表現を根拠にし、藺相如の人物像に着目した意見を述べているか。 D【観察】 ・根拠に基づく意見となっており、かつ、藺相如の言動の真意に迫ろうとしているか。 E【発表】 ・本文の表現を根拠にし、秦の昭王が藺相如のどのような点に感服し帰国させたのかについて意見を述べているか。 D【観察】 ・丹念な読みや語義の理解などから、昭王が藺相如を帰国させたときの背景＝昭王の心情に迫ろうとしているか。 E【発表】
まとめ 5分	・本時の学習のまとめ。 ・次時の予告 ・挨拶	・「完璧」誕生背景の由来と時代背景の考察を深める。 ・次時の学習は「日本の日記文学の確立」を確認する。	・本時の学習内容の確認。 ・次時の学習の確認。 ・挨拶

授業研究会 記録用紙（各教科まとめ） （国語科）

平成28年11月11日（金）

記録者 氏名 加藤 環、斎藤竜二

（助言者） 秋田県立本荘高等学校 教育専門監 今井由佳利 先生

（班構成） 1班…◎黒丸昌昨人（国）、○加藤環（国）、酒井久美子（体）、加賀直子（英）、
佐藤寿（社）、照井晴美（英）
2班…◎宮原公（国）、○斎藤竜二（国）、戸澤博道（体）、武田操（英）、
高橋直也（社）、高橋雅生（英） →◎班長、○記録

●授業者による感想・反省

- ・今回の研究授業のクラスは、普通科3クラス中、最も静かなクラスで、盛り上げにかけることもある。ただ、語彙力はあるクラスなので、もっと深まりのあるグループ学習の時間を意図的に設けべきであると感じた。
- ・ミニ白板を利用しているのだから、意見や根拠のまとめは簡潔にし文字を大きくするよう指示したが、表現の単語化・簡略化ができず、小さな文字で表記、表現してしまったのは残念である。
- ・深まりを持たせるためには、グループ学習の課題2つは盛り込みすぎた。
- ・班のまとめや意見の妥当性を吟味し、深まりを持たせるよう次時にフォローしてこの単元を完結させたい。

●授業のまとめ

成果1班

- ・生徒がよく活動を理解し、役割を認識して活動できていることが規律の良さに表れている。また、活動によく慣れている。
- ・「プリント（予習）→グループの話し合い→ミニ白板でのまとめ」が功を奏していて、意見の視覚化やカテゴリー化の成功している。ねらいの達成という点では、
- ・生徒の発言や疑問から、言語について広がり、学習につなげている。
- ・予習を前提としており、学習習慣の定着になっている。

成果2班

- ・ミニ白板を活用したことで各班の意見が視覚化されていた。また、板書でなくミニ白板にしたことで、付箋紙法のように意見のグループ化が可能になった。
- ・授業規律がしっかりとしており、グループの活動においても起立して発表したことで、一人ひとりが発表すること、発表を聞くことに対する意識が高まっていた。

課題1班

- ・秦と趙の王の力関係など、時代背景の理解力がもっとあっても良い。
- ・「聡明」「剛胆無比」などの言葉をどこから得ているか？ 根拠が弱いのか？
- ・電子辞書の使い方はどうか？ 辞書を用いて調べる語句の選択は適切か？
- ・班内の起立はあえて必要なのか？
- ・グループで話し合う意図について、課題2つは多いのではないか？

課題2班

- ・ミニ白板の字が小さくもったいない班もあった。
- ・各班で出た意見が本当に妥当なものか検証が必要であった。
- ・指示や司会決め時間が多少長く、集約の時間が不足してしまい深まりが不十分であったように思われた。
- ・文章番号でなく、本文の語句や表現に根拠を求めさせるべきだった。

指導助言

- ・言語活動は考えるための手段であり、この授業は「プリントー読むー書くー話すー聞く」と、すべて入っている。
- ・グループ4人でよく話していたが、なぜグループか。考えていたが深まりはより他者がいることで深まる。揺さぶりがほしい。
- ・班で出されたものを検証する時間がもう少しほしい。最後は個におとす、バックすることが必要。
- ・本文の言葉にこだわるべきだが、「藺相如」の人物評に関して、あえて「賢」を用いないようにという指示は良かった。なお、類義語としての「徳」は出ていたが、「才能」や他の語などの言葉を引き出すことも必要ではないか。

理科学習指導案（生物基礎）

日 時 平成28年11月11日（金）6校時

場 所 生物実習室

対 象 1年3組 29名（男子15名・女子14名）

指導者 教諭 松田義徳

教科書 「生物基礎」（東京書籍）

1 単元名 第3編生物の体内環境の維持 第3章免疫

2 単元の目標と評価規準

- （目 標）・体内環境を維持するために、体内への異物の侵入を防ぎ、侵入した異物に対して排除するしくみの重要性を理解できる。
- ・自然免疫のしくみを理解できる。
 - ・適応免疫である体液性免疫と細胞性免疫を説明できる。
 - ・免疫にかかわる疾病、応用について理解できる。

自然事象への関心 ・意欲・態度	科学的な思考・判断 ・表現	観察・実験の技能	自然事象の知識・ 理解
・免疫とヒトの健康に関心や探究心をもち、意欲的にそれらを探究しようとするとともに、科学的態度を身に付けている。	・花粉症・AIDSといった現代病の中に問題を見だし、事象を科学的に考察し、考えを的確に表現している。	・白血球の食作用を観察する技術を身につけ、現象を探し出すことができ、実験の過程や結果を正確に記録している。	・自然免疫、獲得免疫（本時）、アレルギー、血液凝集反応の基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。

3 生徒の実態

1年生普通科のクラスで、男子15名、女子14名からなり、2年次のコース選択はサイエンスコース（理系）、国際人文コース（文系）がほぼ半数である。学習に前向きに取り組む生徒が多いが、学習事項の定着に関しては個人差が大きい。

生物の学習については興味・関心が高い生徒がおり、授業中にも積極的に発言する。しかし、復習不足のため知識の定着が不十分である。

中学校での既習事項

本単元については、2年生理科で「生命を維持するはたらき」（血液の循環、白血球による細菌の食作用）を、3年生の保健で「感染症の予防と免疫」を学習している。

4 単元の指導と評価の計画（全9時間）

時	授業内容	学習活動における具体的評価規準	評価方法
1	免疫	・ヒトのリンパ系、免疫細胞、免疫システムを説明することができる。	発問
2	自然免疫	・皮膚や粘液、食作用による防御機構の違いを説明することができる。	発問
3	適応免疫①（抗原の認識）	・抗原となる物質を説明することができる。 ・免疫寛容を説明することができる。	発問
4 （本時）	適応免疫②（細胞性免疫）	・細胞性免疫のしくみを理解することができる。 ・拒絶反応を説明することができる。	発問 演習プリント ＊ノートの見直し
5	適応免疫③（体液性免疫）	・体液性免疫を理解することができる。 ・二次応答での抗体の産生量を説明	発問 演習プリント ＊ノートの見直し

		することができる。	
6	免疫とヒト①(免疫応答と病気)	・アレルギー、花粉症、AIDS を説明することができる。	発問
7	免疫とヒト②(免疫の応用)	・骨髄移植、予防接種、血清療法を説明することができる。	発問
8	実験：白血球の食作用	・食作用を観察することができる。	実験プリント
9	単元のまとめ(演習問題)	・免疫のシステム全体を説明することができる。	まとめの演習問題(教科書 p141)

5 本時の計画

(1) 本時のねらい

①適応免疫である細胞性免疫のしくみを理解することができる。

②皮膚や臓器移植で起こる拒絶反応を理解することができる。

(2) 学習過程

【A】 関心・意欲・態度 【B】 思考・判断・表現 【C】 技能 【D】 知識・理解

	学習過程	学習活動	教師の支援
			指導上の留意事項と具体的な支援、観点別評価*
導入 10分	- あいさつ - 既習事項の確認 - 本時の目標の提示 ①細胞性免疫のしくみを理解する。 ②拒絶反応を理解する。	○前時を振り返る。 ○本時の目標を確認する。	・あいさつ、整容の確認 ・スライドで前時の復習と本時の学習内容の提示 *意欲を持って本時に参加しているか 【A】
展開 35分	・細胞性免疫のしくみ ・細胞性免疫の実例 ツベルクリン反応 拒絶反応 ・応用的な内容の提示 免疫抑制剤	○細胞性免疫のしくみを理解する。 ・細胞性免疫について板書する。 ・スライドの説明を聞き、整理する。 ・細胞性免疫の確認問題に取り組む。 ○ツベルクリン反応のしくみを理解する。 ○皮膚や臓器移植での拒絶反応について知る。 ・皮膚移植の演習問題に取り組み、理由を説明できる。 ・個→班で正解を確認 ○臓器移植における免疫抑制剤について理解する。	・事前にしくみを板書 ・生徒の板書時間の確保 ・机間巡視 ・確認・演習問題の配付 *細胞性免疫のしくみを理解したか 【D】 ・反応の様子を発問(発赤、腫れる、かゆみ) ・ニュース等での知識を発問で確認 ・机間巡視 *拒絶反応を理解しているか 【D】 ・移植での問題点を説明し、解決方法を発問
まとめ 5分	・まとめ ・次時の予告 ・あいさつ	○細胞性免疫はキラー T 細胞が感染細胞や移植片を直接排除する方法であることを理解する。 ○次時は、体液性免疫を学習することを確認する。	・本時の目標の達成の確認(板書の活用) ・あいさつの確認

授業研究会 記録用紙（各教科まとめ） （理 科）

平成28年11月11日（金）

記録者 氏名 1班 栗林 2班 小田島

●1班（渡部悦 佐々木信 小松田 瀬々 加藤華 栗林）

- ・アニメーション、プロジェクターなどICTを活用していた。（効果的）
- ・「考える時間」が十分に確保されており、静かだったがよい展開。
- ・用語のカードの活用。
- ・導入で、本時の流れがきちんと生徒に浸透していた。
- ・生徒の聞く態度、話し合いに参加する態度などきちんとしていた。真剣な話し合いができていた。
- ・単語ではなく、文章表現で答える設問があってもよかった。
- ・アニメーションの提示のタイミングを直す。
- ・前半25分は、教師の説明が多かった。
- ・話し合いの場面だと言うことが一部に指示が伝わっていなかった。
- ・2つの課題がきちんと達成できる時間配分が必要であった。

●2班（赤平 奥 細谷 渋谷 小田島）

- ・明確な学習課題の提示で、見通しのもてる導入だった。
- ・挙手でレディネスを確認するなど、生徒の状況把握がよくできていた。
- ・大きな図版で情報提示をしたため、素早い展開ができた。
- ・図をもとにした用語への置き換えが分かりやすかった。
- ・動画も準備しており、生徒の興味関心や意欲をうまく引き出していた。
- ・ノート記入の時間が確保され、机間指導がよくなされていた。
- ・発表の場面では、具体的な事例を自分の言葉で表現するように働きかけていた。
- ・プリントなどの資料が多かったが、キーワードでまとめる効率のよい学習ができた。
- ・最後の演習問題は、ポイントがしっかり押さえられていた。
- ・授業のねらいが2つあった。1つに絞ることができればよかった。

<指導主事か助言> 高校教育課 能美佳央 先生

- ・CTを活用した情報提示がよくなされていた。
- ・まとめ方、板書が構造化されていた。
- ・もっと生徒に書かせてまとめさせたいが、じかんがかかる。
- ・予告や予習で時間内の負担を減らせるのではないかな。

家庭科学習指導案（家庭基礎）

日 時 平成28年11月11日（金）6校時
場 所 1年1組教室
対 象 1年1組（普通科）
指導者 臨時講師 糸井周子
教科書 家庭基礎 自立・共生・創造（東京書籍）

1 単元名 食生活をつくる

2 単元の目標と評価規準

（目 標） ・食生活に関心を持ち、栄養、健康、調理、食品衛生などに関する基礎的な知識と技術を習得させるとともに、生涯を通して健康で安全な食生活を主体的に営むことができるようにする。

（評価規準）

A関心・意欲・態度	B思考・判断・表現	D技能	E知識・理解
食生活や栄養のバランスに関心を持ち、意欲的に取り組むことができる。	安全な食材を選択するための情報収集や判断が適切にできる。各自の食生活を分析し、その課題を見つけ、改善策を考えることができる。	各自の食生活を分析し、その課題を見つけ、改善策を提案することができる。各ライフステージに必要な栄養のバランスを考えて、献立を作成することができる。	食の安全性に関する知識を理解している。栄養のバランスを考えた献立を作るための知識を理解している。

3 生徒の実態

男子14名、女子14名、計28名の学級である。明るく素直な生徒が多いが、授業ではやや消極的な生徒も見られる。

現状に満足している生徒が多く、よりよくするために自分の生活から課題を見つけ、具体的な改善策を考えることが少々苦手な傾向にある。

4 単元の指導と評価の計画（12時間）

時	授業内容	学習活動における具体的評価規準	評価方法
2 本時 (1/2)	①食生活について考える	各自の食生活を分析しその課題を見つけ、改善に向けた話し合いに主体的に取り組んでいる。また、改善策を提案することができるか	ノート プリント 机間指導
5	②食事と栄養・食品	食生活や栄養のバランスに関心を持ち、意欲的に取り組むことができるか	ノート プリント 机間指導
1	③食生活の安全と衛生	安全な食材を選択するための情報収集や判断が適切にできるか	ノート プリント 発表
2	④生涯の健康を見通した食事計画	各ライフステージに必要な栄養のバランスを考えて、献立を作成することができるか	ノート プリント 机間指導
1	⑥これからの食生活 持続可能な食生活を目指して	食の安全性に関する知識を理解しているか	プリント

5 本時の計画

(1) 本時のねらい

- ・自分の食生活に関心を持ち、よりよくするために課題を見つけよう。

目指す生徒の姿

日頃の食事に関心を持ち、分析しようとしている生徒。

よりよい生活になるように課題を積極的に見つけようとする生徒。

(2) 学習過程

A 関心・意欲・態度 B 思考・判断・表現 C 技能 D 知識・理解

学習過程	学習活動	教師の支援
		指導上の留意事項および観点別評価と具体的な支援
導入 7分	○前時の確認 ○本時の目標を知る	自分の食生活に関心を持ち、よりよくするために課題を見つけよう
	○本時の進め方を確認	
展開 41分	○食生活を振り返る	・自分の3日間の食事記録を基に、毎日の食事について、良いところと改善が必要なところに気づかせ、書き出す〔ワークシート〕 (3分) ・ペアになり食事記録を交換し、それぞれが食のアドバイザーとなり、他の生徒の食事の良いところと改善が必要なところを指摘し、アドバイスをさせる〔ワークシート〕 (10分×2)
	○食生活の現状について	・ペアは、1回目男女で、2回目は運動部同士・文化部及び無部同士にさせる〔観察〕【A】 ・良いアドバイスができるように、聞き取り調査もするようにさせる ・ワークシートに記入するだけではなく、指摘箇所を示し説明させる ・自分が気づかなかった良いところや改善が必要なところ、他の生徒の食事記録を見て改めて気づいたことを記入させる
	○課題の整理	・改善が必要なところによって上げられた点が習慣化することで生じてくる課題を考える〔ワークシート・発表〕 (15分) ・本時のねらいを再度確認し、改善が必要な点に着目させる ・課題を見つけることができたか〔観察・ワークシート〕【A・B】
まとめ 2分	○本時のまとめ	・目標が達成できたか確認する〔ワークシート〕

授業研究会 記録用紙（各教科まとめ） （家庭科）

平成28年11月11日（金）

記録者 氏名 佐藤 貴之

出席者 【糸井 田口 浅野 小野寺 佐藤貴】

＜授業者から＞

- ・身近な生活の課題を取り上げた。
- ・三日間の食事記録を自己分析
- ・ペアワークを通して課題の気づきにつなげた。
- ・様々な家庭環境があるため、実態把握し、サポートにもつなげたいと考えた。また、現状の改善だけでなく、家庭を築いたときのスキルにすることを意識させた。

＜協議＞

(1) ペアワークについて

- ・活発に話し合う雰囲気づくりができていた。
- ・「男女」、「同じ部活動」とペアの形を変えることで異なる視点からアドバイスを送ることにつながった。

(2) 言語活動

- ・モデルセンズがあり、話しやすい形となっていた。
- ・アドバイスの視点を黒板に貼っていた「食事とは」に照らし合わせて話すことで、よをきり深まったのでは。

(3) ワークシートの工夫

- ・記録の内容が適切。
- ・アドバイスシートを貼る部分もあり、思考の流れがスムーズ。

(4) 焦点化

- ・「習慣化」というキーワードを出したことで、それぞれの課題をより切実な問題として捉えることができていた。

＜助言 浅沼 和子 教育専門監＞

- ・ペアワークが適切。
- ・学習の流れがスムーズ→見通しがはっきりしているため、ねらいの到達につながっている。
- ・家庭科とプライベートとの関わりについて、「生活改善」をキーワードに結びつけ、配慮できていた。（様々の家庭環境への対応）
- ・ペアワークは有効であったが、活動の共有化をどう進めるかを考えてもらいたい。教師がコーディネート力を発揮する場面。よりねらいに迫るためにも、共有化を大切に。

総合技術科「情報技術基礎」学習指導案

日 時 平成28年11月11日（金）6校時
 場 所 14組教室
 対 象 総合技術科 1年4組（男子31名・女子4名）
 指導者 高橋純一
 教科書 情報技術基礎（実教出版）

- 1 単元名 第4章 BASICによるプログラミング
 1・2節 BASICSの特徴 四則計算のプログラム

2 単元の目標と評価規準

（目 標）BASICの特徴、簡単なプログラム作成について理解させる。
 データの入出力、関数の計算について理解させる。

（評価規準）

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
プログラムの作成手順に関心を持ち、意欲的に学習に取り組もうとする。 基本的な命令を理解し、四則演算プログラムに関心を持ち意欲的に学習に取り組み、学習態度は真剣である。	簡単なプログラムを読んで、どのような結果が出力されるか考えることができる。	BASICの各命令の意味を理解してプログラムを作成することができる。	BASICプログラムの作成手順を理解し、簡単なプログラム作成のための知識を身につけている。

3 生徒の実態

情報技術に関する興味・関心が高い生徒が多く、授業への取り組みも意欲的である。発問に対して、しっかりと考えて発言する姿勢が身についている。

4 単元の指導と評価の計画（全8時間）

時	授業内容	評価規準	評価方法
1(本時)	・BASICの特徴 ・四則計算のプログラム	・プログラムを作成して、出力される結果を推測できる。【思考・判断・表現】 ・BASICの命令の意味を理解し、簡単なプログラムを作成できる。 【技能】	○観察 プリントの記入状況 ○発問
2	・文字データの取り扱い ・データの読み取り	・文字データを出力するプログラムに関心を持ち、意欲的に学習に取り組む【関心・意欲・態度】 ・プログラムを様々な方法で作成し実行する技能を習得している。【技能】	○観察、発表 プリントの記入状況 ○発問
3	・分岐処理	・分岐処理プログラムを読んで、処理手順をトレースできる。【思考・判断・表現】 ・IF～THEN文などについて使い方に関する知識を身につけている。【知識・理解】	○観察、発表 プリントの記入状況 ○発問

5 本時の計画

(1) 本時のねらい

- ・BASICの各命令の意味を理解して簡単なプログラムを作成することができる。【技能】
- ・簡単なプログラムを読んで、どのような結果が出力されるか考察できる。【思考・判断・表現】

(2) 学習過程

学習過程	学習活動	教師の支援	
		指導上の留意事項	評価の観点と評価方法
【導入…5分】 ・前時の復習 ・本時の説明	・前時の復習を行う。 ・本時の目標と学習内容を確認する。	・流れ図について習得状況を確認する。 ・目標をプリントに明記する。	
【展開…35分】	・BASICの特徴を理解する。 ・流れ図にBASIC言語を対応させる。 ・流れ図に合わせた、簡単なプログラム作成を考える。 ・いろいろなプログラムをBASICでつくる。	・簡単な英単語とBASIC言語の関係に気付く。 ・流れ図を作り、その流れを考えたプログラム作成ができているか確認する。	自分の考えを述べる ことができる。 【思考・判断・表現】 簡潔にまとめたプログラムか。 【技能】 ワークシートの記入状況
【整理…10分】 ・まとめと自己評価	・本時の要点をまとめ、学習内容を整理する。 ・本時の取り組みを自己評価する。	・ポイントの確認する。 ・次回の予告を行い、次回の準備を促す。	

(3) 学習活動に即した評価規準

学習活動に即した評価規準	十分満足できる状況[A]	努力を要する状況[C] 生徒への支援
[思考・判断・表現] ・自分の考えを述べる ことができる。	・自分の意見や他の意見を考慮し、考えをまとめ、発表できる。	・考えるポイントやヒントを与え自分の意見を述べるよう促す。
[技能] ・ワークシートにBASIC言語が適切に記入されている。	・ワークシートがまとめられており、本時の要点が丁寧に整理されている。	・関連ページを示して、理由を考えられるように促す

授業研究会 記録用紙（各教科まとめ） （工業科）

平成28年11月11日（金）

記録者 氏名 1班 渡辺真 2班 佐藤匠 3班 川崎知之

● 1班（加藤 高橋留 鎌田 成田 加藤拓 渡辺）

①考える授業について

- ・目標がはっきりしていた（わかりやすかった）。
- ・フローチャートの関連がよかった。
- ・目標の「プログラムを使える」という使えるはどもくらいのことをさすのか。
- ・フローチャートの学習が効果的であった。

②言語活動について

- ・発表を通した言語活動の充実
- ・理解度の把握
- ・I F 文の説明
- ・発言の機会が少なかったのでは。
- ・黒板に書かせるなど活動の場があったが、機会がもっとあってもよかった。

③学週間の定着について

- ・調べ学習（教科書使用して）が学習習慣の定着につながる。

④その他

- ・プリントの使い方、チョークの色分け

● 2班（本間 佐藤三 黒澤 大越 佐藤匠）

- ・場所をコンピュータ室にして授業を行うと、実際にプログラミングを入力できるのでよい流れができた。入力ミスもわかる。

・演習問題を多くすればグループや隣同士で話し合い考えさせる時間がとれたのではないか。また、このことが「言語活動が効果的」に行われることにつながったのではないか。

- ・プリントや流れ図を使用していることで、考えさせる工夫がされている。
- ・知識の定着が図られている。指名に対して答えることができる。
- ・生徒は元気がない。静かであるが、全員が授業に参加している。
- ・他教科の研究授業に参加してよかった。

● 3班（五十嵐 増田 高谷 加賀屋 川崎）

- ・丁寧である。
- ・分からなくて取り残されている生徒がいない。
- ・生徒との会話が普段からあることが感じられた（普段の授業がしっかりしている）。
- ・英語を入れる（発展が見える）。
- ・チョークの色に意味付けがあればよかった。
- ・プログラムの発表が1人でなく複数であった方がよかった。
- ・問いかけの際は、指名した方がよかったのでは。
- ・フリーソフトの紹介

2 探究活動について

瀬々 將吏

探究活動の成果と課題

探究推進部

1 探究活動の経緯と目標設定

平成 20 年度に高等学校での「探究」が開設されて以来、探究活動は本校の教育目標を具現化する実践として継続されてきた。平成 27 年度末にスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定期間終了し、本校の探究活動を取り巻く環境が大きくなった。このことを受け、本校の探究活動を統括する「探究推進部」の年度当初の目標を以下のように設定した。

【目標】

本校における探究的な学習活動の指導体制を確立し、21 世紀を主体的に生き抜く人材に求められる資質・能力を育成する。

【重点目標】

- (1) 年度ごとに変化する状況に左右されず、安定的に「中学校総学」「探究基礎」「探究」を運営するための体制を確立する。
- (2) 探究活動において育成を目指す資質・能力について、全校で共通理解を図る。
- (3) 探究活動において育成を目指す資質・能力を評価するための手法を研究・開発・実践する。
- (4) 全ての教科において探究的な学びを推進し、目指す資質、能力を育成・評価する方法を検討する。

2 探究活動の全体像

探究活動の中心となるのは、各学年の「総合的な学習の時間」等において授業時間内に実施される授業である。共通認識として、前節の「目標」を共有した上で、各学年において運営が行われている。

表 1: 各学年における探究活動

学年・学科	単位数	名称
中 1	2 単位相当	環境学
中 2	2 単位相当	創造学
中 3	2 単位相当	日本学
高 1 普通科	1 単位※	探究基礎
高 1 総合技術科	3 単位	探究基礎
高 2 普通科	2 単位	探究
高 2 総合技術科	1 単位	探究

※「社会と情報（2 単位）」においても、探究的な活動を実施している

3 高校 1 年普通科「探究基礎」

【目標】

探究を進める上で必要な課題設定や問題解決、思考、判断、表現の基礎的スキルを身に付けさせる。

【対象と運用】

高 1 普通科 3 クラス、クラスごとに運営、担当は担任

高校 2 年生「探究」の入門編として、グループ単位での課題研究を行う。

時期	活動内容	詳細
1 月	グループ編成および テーマ設定	クラス内で研究テーマごとのグループを編成する。 研究計画書を執筆する。
2 月	調査・検証	研究計画書に従って、調査・検証を行う。
3 月	成果の発表	クラス内発表会を行う。クラスから代表 1 グループを選抜し、全体発表会を行う。(総合技術科と合同) 3 月 1 6 日 (木)

【研究テーマ (抜粋)】

日本とアメリカのお菓子の趣向の違い

幼児期における遊びや興味に対する男女差

働きすぎの日本人

日本昔話とグリム童話

秋田の地域活性には何が必要か？

眠気を覚まそう！

GCC カタログによる水メーザー天体の探索

巻けば巻くほど強くなる紙は？

ペイブレードにおける持久力について

4 高校2年普通科「探究」

【目標】

社会や学問領域に位置づけられた課題を見出し、それを解決し、新しい知識を産み出す探究活動を通じて、21世紀を主体的に生き抜く人材に必要な資質・能力（コンピテンシー）を育成する。

【対象と運用】

高校2年生普通科、ゼミごとに分かれて運営。

平成28度 2年普通科「探究」 年間指導計画			
秋田県立横手清陵学院高等学校			
内容	主な生徒の活動	活動単位	時数
オリエンテーション	探究の趣旨と年間の流れを理解する。	普通科	2
ゼミアンケート作成・提出	どのゼミに所属するか検討する。	クラス	2
ゼミ決定・テーマ検討	ゼミ担当教員とディスカッションしながらテーマを絞り込む。	ゼミ	2
テーマ決定・研究計画立案	テーマを決定し、それに基づいて具体的な研究計画を練る。		4
研究計画完成・報告	研究計画を完成し、担当教員に提出する。		4
検証	計画に基づいて、検証を行う。		14
中間報告会	理系と文系単位で、中間報告を実施し、ディスカッションする。		4
検証	計画に基づいて、検証を行う。		4
発表会ガイダンス	博士号教員が研究発表のガイダンスを行う。		2
発表会に向けて	研究発表会に向けて、ポスタースライドの作成、論文執筆やプレゼンのまとめ方などの指導を受ける。	普通科	4
探究発表会	ポスター発表と口頭発表を行う。	全校	6
論文執筆	英語のabstract作成と論文執筆を行う。	ゼミ	10
論文原稿一次提出	論文を指導教員に提出し、チェックしてもらう。		2
論文修正	論文を修正する。		4
論文完成	論文を完成させる。		4
サイエンスダイアログ	英語による科学の授業を受ける	普通科	2
		時数計	70

5 成果と課題（探究推進部 分掌反省会議資料から抜粋）

ア 重点努力目標

- (1) 年度ごとに変化する状況に左右されず、安定的に「中学校総学」「探究基礎」「探究」を運営するための体制を確立する。
- (2) 探究活動において育成を目指す資質・能力について、全校で共通理解を図る。
- (3) 探究活動において育成を目指す資質・能力を評価するための手法を研究・開発・実践する。
- (4) 全ての教科において探究的な学びを推進し、目指す資質、能力を育成・評価する方法を検討する。

イ 具体的方策について

- (1)-① SSH 予算に頼らない年間計画を作成する。
- (1)-② 行事や活動の必要性を再検討する。
- (2)-① 適切な部署から年間目標に関してアナウンスを行う。
- (3)-① 各学年の授業において、生徒による相互評価や教員による評価を行う。
- (4)-① 各教科において、年度当初に資質・能力の育成・評価法の指針を策定する。

ウ 反省点、改善点及び来年度への課題

- (1)-① 今年度は、発表用の資材（ポスター印刷代）については前年度からの備蓄でまかなうことができた。しかしながら、課題研究の消耗品費などについては、各教科の備蓄や、教員個人の研究費などでまかなっており、先行きが不透明である。学校として、探究活動のための予算枠を確保することが必要である。また、探究活動の内容についても、本校の実情やねらいに沿ったものにするため、教員間の議論が必要だと感じる。
また、普通科「探究基礎」を学年部で担当する試みを初めて実施した。各教科の持ち時数が決まった後での上乗せだったことや、教科情報に相当する部分が専門的であり各教員が対応しきれなかったことなど、担当教員にとって過大な負担となった。学校として、「情報」の部分について指導可能な専門教員を配置し、3 学期になってから課題研究の入門に移行するなど、教員の負担を軽減する必要がある。
- (1)-② SSH 非採択の連絡後時間がなかったため、前年度からの行事や活動を可能な限り引き継ぐ方法で進めた。しかしながら、本校の実情と今後の方針を踏まえ、行事や活動を精選していく必要がある。
- (2)-① 学校の重点目標として、「高い志と探究力、人間力の育成」が設定されており、おおまかな共通理解はできていたと考える。しかしながら、より徹底を計るため、共通の目標を周知した上で、年度当初に各学年・各担当で評価方法を検討する必要がある。
- (3)-① 各部門において、十分な評価活動を行うことができた。
- (4)-① 各教科においては、年度と当初の目標のなかに探究的な項目が盛り込まれている。しかしながら、それらの検証が不十分であった推進部から押しつけることはせず、まず各教科、各教員から実践事例を集め、全校で共有できる仕組みを作ることが重要だと考える。

3 校外研修の記録

(1) 教員派遣研修

成田 忍

鎌田 正樹

(2) 道徳教育指導者要請研修

山本 博史

(3) 秋田県学校体育研究大会

神谷 忠昭

平成 28 年度教員派遣研修実施報告書

学校番号	4 1	学校名	横手清陵学院高等学校
記載者職氏名	実習教諭 成田 忍		

研修講座名・訪問校名・研修先住所等		研修日時	
平成 28 年度 配電技能競技大会 見学 東北電力（株）能代営業所内		平成 28 年 5 月 26 日（木） 11：00～15：00	
		計 1 日間、4 時間	
講師・担当者名		研修者氏名(教科名・校務分掌)	
株式会社ユアテック 秋田支社 副支社長兼配電部長 渡部正志様 他		教科（工業） 実習助手 成田忍 教諭 五十嵐宏秀	
計 15 名（関連会社含む）		計 2 名	
研修のねらい	実際の工事現場での作業の競技大会を見学することにより、本校で行っている電気工事士の実技指導に役立てるとともに、作業安全のため現場で行われている指揮命令系統を学び、校内での指導に役立てる。		
研修内容・状況等	1 概要説明 2 作業現場視察（A 班、B 班に分かれる） ○高圧引留グリップ 取換工事 ○間接活線工法による H P 取付・取外 ○工事用変圧器取付・取外 3 意見交換		
成果と課題	実際の工事現場での配電作業を見学することにより、電気工事会社での配電設備工事では実際にどのような作業をし、またその作業にどのような技術や能力が必要なのかを知ることができた。また、安全に配慮した「声かけ」や「確認作業」の重要性も学ぶことができた。 本校では第 2 種電気工事士の指導を 2 年生全員に行っているが、主に屋内配線の作業であり、実際に就職してすぐに屋外での配電作業に従事できるわけではないと感じた。しかし基本的な工具の使用方法的の習得や技術の向上は共通するものであり繰り返し練習をしっかりと行うことが大切であると感じた。また、安全作業に対する心構えや、作業効率を良くする手順の工夫、整理整頓などの指導も普段から徹底する必要も感じた。 仕事を正確かつ安全に行うためにはコミュニケーション能力の向上が必要不可欠であるということを強く感じた研修となり、今後の指導に十分に活かせるようにして行きたい。		

(※ 1) 各研修の実施後速やか提出すること。 (※ 2) 研修のねらいを明確にすること。
(※ 3) 研修ごとに作成すること。

平成 28 年度教員派遣研修実施報告書

学校番号	41	学校名	横手清陵学院高等学校
記載者職氏名	教諭 鎌田 正樹		

研修講座名・訪問校名・研修先住所等		研修日時
電気自動車・燃料電池車 ・ソーラーカー製作講習会(東日本) ーエコ電気自動車の基礎から応用までを学ぶー		2月18日 8:50～17:40
東海大学代々木キャンパス4号館講堂 (〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4)		計1日間、8時間
講師・担当者名		研修者氏名(教科名・校務分掌)
池上敦哉 (KYBモーターサイクルサスペンション) 須藤康裕・藤澤 徹 (神奈川工科大学) 磯村 翼 (ミツバ) 新井英行 (PROJECT MONO◇TTDC) 山本晴彦 (TEAM RED ZONE) 木村英樹 (東海大学)		鎌田 正樹 (総合技術科 システム工学類 教諭)
計6名		計200名
研修のねらい	1 エコカー製作の最新技術を学び、課題研究や課外活動のエコカーレースの指導に役立てる。 2 全国初の工業系中高一貫教育校というメリットを生かすために、昨年度に引き続き、中学生も参加できるWEM-LIGHTに出場し上位入賞するための技術を習得する。	
研修内容・状況等	講習プログラム ・「講習会開催にあたって」 川越繁一 (日本太陽エネルギー学会事務局長) ・「人力最高速度チャレンジ用自転車の開発」 池上敦哉 (KYBモーターサイクルサスペンション) ・「KAIT SpiritにおけるテレメトリとBMSの開発事例」 須藤康裕・藤澤 徹 (神奈川工科大学) ・「KV-BIKEへの挑戦」 磯村 翼 (ミツバ) ・「WEM車両"MONO-F"の品質」 新井英行 (PROJECT MONO◇TTDC) ・「オリンピッククラス専用車"FREEDOM"の開発2」 山本晴彦 (TEAM RED ZONE) ・「バッテリー・モータの考え方とエボルタチャレンジへの応用」 木村英樹 (東海大学)	
成果と課題	エコカーレースマシンの製作講習会であったが、内容は、池上氏による、NHK番組「超絶凄技！」内の人力最高速度チャレンジ自転車開発から、走行抵抗を減らすためのマシンの剛性や安全性、運転のしやすさなどの機械的なものから、バッテリーを電氣的に制御するアプリケーション開発、エボルタチャレンジへの応用などの電氣的なもの、そしてエネルギーマネジメントや費用に関するものまで、非常に多岐にわたっていた。 特に印象深かったのは、WEM車両、MONO-Fの品質の講演である。WEM-GPで年間総合優勝を獲得したチームである。今大会で最後の参加となるため、車両性能を発揮し続けられる「品質」について、今までのノウハウを隠すことなく紹介頂いた。「綺麗な車は早い」といわれるが、綺麗だから早いのではない、レースの準備を計画的に進めることが重要である。見栄えを気にするあまり、「品質確保」が後回しになっては本末転倒である、という言葉が印象に残っている。技術的なレベルは高いが、品質を向上させるため、些細なことまで何回も検証し実施している。配線端子接合部の透明化や、バッテリーの逆接防止、パンク防止剤の使用法、視野を確保するための二重スクリーン活用、撥水剤の塗り方等、自分たちでも実践できる技術を学ぶことができた。楽をして得られることは無いことを再確認させられた。 また、各講演者ともに、常に新しいものにチャレンジし挑戦し続けている。「あらゆる現象は、何回も試行錯誤を繰り返すことで実証される。常識に囚われず、感じる力を磨け。失敗から学べ。」とトップ技術者の方々がいつていた。 本校では、エコカー製作に留まらず、課題ロボットの製作、相撲ロボット、WROと、多くの大会への参加を通して技術、チームワークを向上させている。高校生だけでなく、中学生にもいろいろな技術を学ばせて行きたい。	

平成28年度 道德教育指導者養成研修 (ブロック別指導者研修)【北海道・東北ブロック】

～道德教育推進教師の養成に向けて～

秋田県立横手清陵学院高等学校
教諭 山本博史

研修期間：平成28年10月24日(月)～26日(水)
研修場所：コラッセふくしま(福島県福島市三河南町1番20号)
主催：独立行政法人 教員研修センター、福島県教育委員会
参加者：北海道・東北地区の小・中・高の教員、各教育委員会88名、福島県教育委員会

(1) 道德指導者養成研修の日程

第1日目〈10月24日(月)〉

- ・行政説明「道德の『特別の教科』化をめぐる動向について」
- ・講義1「今、求められる道德教育の充実を目指して」
- ・演習1「学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の推進上の課題」
- ・事例発表・協議「学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の実践と課題」

第2日目〈10月25日(火)〉

- ・講義2「人間としての在り方生き方に関する教育の展開」
- ・演習2-1「学校の教育活動全体を通じて行う人間としての在り方生き方に関する教育の展開」
- ・演習2-2「人間としての在り方生き方に関する教育の各教科等における具体的な教材研究・実践」
- ・発表・協議「人間としての在り方生き方に関する教育の充実に向けて」

第3日目〈10月26日(水)〉

- ・講義2「体験活動や実践活動を通じた道德教育」
- ・演習3「道德教育の効果的な推進政策－研修プランの作成－」
- ・講義3「道德教育の充実を図るリーダーとして」

(2) 道德指導者養成研修に参加して

研修に先立ち、平成27年3月の学習指導要領等一部改正告示での、『特別の教科 道德』の設置を踏まえ、今夏8月、中教審の教育課程部会の「これまでの審議のまとめ」の中で、「特に高等学校の道德教育の充実方策等について報告」がなされた。

研修初日、会場に足を運び、配付された資料の数々を目の当たりにした時、「小学校・中学校」と「高等学校」の道德教育に対する取り組み・意識・体制について、歴然とした差を感じ、「とんでもない研修に参加してしまった」という気持ちが正直強かった。

参加者88人のうち高等学校は10人に過ぎなかったが、本校同様、本格的な全体計画・別葉が整っていない学校も見られた。本校の場合も、「キャリア教育の全体計画」の中に「道德教育の項目」が盛り込まれているだけで、教科・学年・分掌ごとの別葉は存在していない。

3日間とも、文科省初等中等教育局教育課程の教科調査官などを講師に、特別教科化へのいきさつ、道德教育の充実を目指しての講義では、「普段の授業や授業以外での教育活動・実践での指導・支援を堂々として行うことこそ道德教育の根幹であること」が示され、高等学校における組織的な取り組みの必要性を大いに感じた。

小・中学校の先生方との演習では、きめ細やかな教科、道德授業、そして、教科外活動での指導の実践を伺い、小～中～高の一貫した指導の流れを形成するには、自治体・地域・保護者・企業を交えた異校種の連携・共通理解のさらなる強化が必要であると感じた。

(3) 道德指導者養成研修の終えて、今後の道德教育・指導について

次期学習指導要領が、平成30年から小学校を皮切りに順次導入されていく。また、その改訂の目玉の一つと言っても過言ではない「小・中学校の『特別の教科 道德』」は、高校にとっての道德教育という観点ではなく、やはり生徒にとっての道德教育という観点に立ったものでなければならない。

小・中学校は「特別の教科 道德」の導入に向け、数年前からすでに全体計画・別葉の作成が行われ、各校ともほぼ毎年で改訂も行われている。我々の教育活動のすべてが道德教育に通ずることから、『多岐に渡り細部に至るまで、詰め込み過ぎと思われるところから、いかにシンプルにしていくか』が全体計画・別葉の作成の今後の課題だ」との、文科省初等中等教育局教育課程・教科調査官の指摘があった。

しかし、今研修を踏まえ、出席の各県の指導主事・教員が学び得たことをもとに、講習や伝達を主とした各種研修会を開かれることであろう。そこで、それを踏まえ、高等学校の多くが、これから本格的に全体計画・別葉の作成に取り組むことになる。学校全体での道德への取り組みは、これまでの学校の組織的な取り組みを精査する一助となるであろう。

今研修で我々出席者は、講師の方々から、道德推進教師としての手腕をいかに発揮しようという激励の言葉を賜ったが、小・中学校では既に明確な位置づけがなされている学校もある。様々な分掌との連携を密にし、今後、本校の特色に即した全体計画・別葉の着手に努めて参りたい。

〈演習 1 ワークシート〉 学校の教育活動全体を通じて行う道德教育（道德教育指導者養成研修）

演習 1 「学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の推進上の課題」		都道府県等	秋 田 県	受講者番号	6 6
所属 (学校名/教育委員会名)	秋 田 県 立 横 手 清 陵 学 院 高 等 学 校	職 名	教 諭	氏 名	山 本 博 史

あなたの学校では、どのような子供像を目指して道德教育を推進していますか？	よりよい生き方を追求し、自己への問いかけを深めることができる。 ～多様な価値判断に触れ、自己の価値判断とすりあわせることができる。～
道德教育を推進する上でのポイントは何か？	よりよい生き方、自己への問いかけ、多様な価値判断、自己の価値判断
そのポイントは道德のどのような内容と関わりがありますか？	1－（3）、3－（1）、（3）
それがあなたの学校の重点内容項目です。これは、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の重点でもあるのです！ それでは、重点内容項目に関わる指導を考えてみましょう！ 教科と学年、単元や題材などを想定してください。	
教科名	国語科 （高等学校第 1 学年）
単元・題材名	『羅生門』 芥川龍之介
本時の目標 (道德教育の視点)	老婆の弁明を聞いた後の、下人の心に生じた「ある勇氣」と彼の行動の心意の過程を読み取る。（下人の取った「老婆に対する行動」〔＝生きるために仕方なくする行為・悪は許される〕の是非を根拠に基づいて示せるようにする）。
1 時間の授業の中で、どのように道德性を養うのが分かるような授業の流れを想定してください。このときに、教科の特質をしっかりと押さえましょう。	
指導の流れ	○実施時期…高校 1 年生の夏休み前の 6 月末～7 月初め 1 前時の学習の振り返りをし、本時の目標を確認する。 老婆を捕らえた下人が、死人の髪の毛を抜く理由を、どのような思いで聞いていたのだろう。 2 第 5 段落を読み、以下の①・②について、下人の心情をまとめる。 ①下人に生じた「ある勇氣」とは、どのような勇氣か。 ②「嘲るような声で念を押した」ときの下人の心情はどのようなものか。 3 2 について、グループで意見を発表し合いまとめる。 4 老婆の弁明後の下人の言動の真意について、学級全体で話し合う。 5 本時の学習のまとめをし、次時、「最後の一文から、下人のその後の行方」について考察することを提示する。 （補足）本校は全国初の県立工業高校を母体とした中高一貫教育校である。なお、私は、昨年、勤務校で中高接続（前年度高校 3 年部職員が次年度中学校 3 年部に所属）の役目として副主任・共通担任を務めた。また、授業では高校 1 年生の主担当であったが、中学校 3 年生も 1 クラスの授業を担当した。上記授業の実施 1 年前の 6 月末～7 月初めに、中学校 3 年生では『高瀬舟』／森鷗外を扱い、弟殺しの喜助の行動の是非について考えた。

平成28年度道德教育指導者養成研修（ブロック別指導者研修）

演習2-1 「学校の教育活動全体を通じて行う人間としての在り方生き方に関する教育の展開」		都道府県等	秋 田 県		受講者番号	6 6
所属 (学校名/教育委員会名)	秋田県立横手清陵学院高等学校	職名	教諭	氏名	山本 博史	

●高等学校学習指導要領第1章第1款の2に記載されている「人間としての在り方生き方に関する教育」について、例えば、学校としての指導の重点や方針を明確にした全体計画や年間指導計画の作成・活用、効果的な体験活動の工夫、全教職員や保護者・地域の人々の理解の促進及び連携協力体制の工夫などの中から、学校全体の取組やその取組に当たっての課題について整理する。

↓

「学校の教育活動全体を通じて行う人間としての在り方生き方に関する教育の展開」

1 はじめに～学校としての指導の重点や方針を明確にした全体計画や年間指導計画の作成・活用

本校は、全国初の工業高校を母体とした中高一貫教育校で、中学生と高校生、普通科と専門学科、内進生と外進生というように、多様な生徒集団から構成されており、「学校教育目標」である「21世紀を主体的に生き抜く人材の育成」の実現を目指し、互いを認め合うことと、競い合うことの相乗効果をもって人間力を育むことができる学校である。

本校では「平成28年度キャリア教育の全体計画」の中に、「道德教育の目標」を明記するとともに、「人間関係形成・社会形成能力」・「自己理解・自己管理能力」・「課題対応能力」とは別に、具体的な目標を設定している。また、各教科の年間指導計画内に「キャリア教育の目標」が示されている。

2 効果的な体験活動の工夫

本校は、中高の連携・接続にも配慮した教育活動を行っている。例えば、秋や卒業前には、本校中学校の出身者で就職先や大学進学先の決定した生徒が、中学校の学活などにゲストティーチャーとして赴き、中学校時代の成功と失敗、中学校から高校に進む際の普通科・（工業系の）総合技術科の選定の経緯、高校時代の勉強と部活動の両立、進路選定と合格を勝ち取るまでの経緯、高校卒業後の将来設計について話す機会がある。

また、中高一体の行事・取組として体育祭（運動会）があり、中高・学年・学級の枠を取り払い、生徒のみならず教職員も含めて全校が6色（6チーム）に分かれて行われる。中高6年間同じチームとなり、様々な枠を越えたこのチームが、年に一度のこの日のために2週間位かけ綿密な作戦を立て・練習を行う。高校を卒業し社会に出ると異年齢層との関わりが重要になる。そういう視点から見ても、本校の体育祭は効果的な体験活動と言えよう。

3 全教職員や保護者・地域の人々の理解の促進及び連携協力体制の工夫

本校では学校報として月1回発行を基本として『青春の丘』という広報誌を、中高の各種大会や学校行事の後に発行している。中高生それぞれの活躍を生徒・保護者・地域に向け発信している。また、学校行事の際には、中高生の各家庭はもちろん、学校近隣の住民の方々にもお願いして学校行事の案内の配付（約1000部）に協力いただいている。

そのため、生徒の保護者のみならず、地域の方々までもが学校行事を楽しみにしており、時折、感謝のお便りやお電話もいただいている。地域の方々に愛され応援されていることを改めて実感しているところだが、その期待に応えられるよう行事の円滑な運営、資格取得の推進と励行、学習面も含めた進路実績の向上、部活動の充実を努め、その成果の発信も充実させて地域と共に歩む学校として教育活動の実践に励んでいきたい。

4 学校全体の取組やその取組に当たっての課題

本校は、生徒の興味・関心に基づいてテーマを定め、それを追究し結果を発信する探究型学習に、中高6年間を通して取り組んでいる。「総合的な学習の時間」を中心に活動し系統的に進めていく中で、コミュニケーション力など他者と関わる力を高めつつ、社会の一員として役割と責任を自覚できるよう道德教育も視野に入れた活動を展開している。本校職員には、生徒の主体性を育むため、活動の支援や調整をする「コーディネート力」を一層高めることが課題となる。

平成 28 年度道徳教育指導者養成研修（ブロック別指導者研修）

演習 2-2 「人間としての在り方生き方に関する教育の各教科等における具体的な教材研究・実践」		都道府県等 名		秋 田 県		受講者番 号	6 6
所属 (学校名/教育委員会名)	秋 田 県 立 横 手 清 陵 学 院 高 等 学 校		職 名	教 諭	氏 名	山 本 博 史	
● 高等学校学習指導要領第 1 章第 1 款の 2 に記載されている「人間としての在り方生き方に関する教育」について、実践する際の教材研究の進め方や、公民科や総合的な学習の時間及びホームルーム活動等の特質を踏まえ、各教科・科目等が担うべき内容を明確した指導、日常の指導や、家庭や地域社会との連携など具体的な実践事例について整理する。 ↓ 「人間としての在り方生き方に関する教育の各教科等における具体的な教材研究・実践」 1 はじめに～各教科の特質を踏まえた道徳へのアプローチ、実践する際の教材研究の進め方～ この演習に標記された事項について、学校の教育活動すべてが道徳教育と成りうるわけで、各教科をはじめとし、あらゆる教育活動のなかで教師が意図的に、道徳教育を行うべきである。 例えば、国語科では現代文の「評論文」、公民科での「現代社会」「倫理」、また、総合的な学習の時間及びホームルームにおいても、「是非を問うテーマ・課題」を扱う際、ディベートの手法が活用できる。毎単元後とまではいかないが、単元後の考察時の教材・課題についての学習の深化として、ディベートを実践することが求められよう。その際、ディベートの根幹である、根拠に基づく意見の提示を怠ってはならない。 2 各教科・科目等が担うべき内容を明確した指導、日常の指導 社会生活を営むうえでは、物事の是非や究極の選択を求められる命題が存在し遭遇する場面が多々ある。しかし、その演習として学校においては、教師側が時機や発達段階に応じ、ただ単に意図的に提示し要求するだけではない。例えば、本校の「目指す生徒像」に、『なぜ』という問題意識をもち、自ら進んで解決する生徒（探究心、課題解決力）がある。また、本校「平成28年度の重点目標」は、「高い志 探究力 人間力の育成」である。これらは本校の学校教育目標「21世紀を主体的に生き抜く人材の育成」に通ずるものである。 また、このような到達目標を目指し、各教科においては「問いを発する生徒を育てる授業の工夫」が求められ日々実践に努めている。そして、これらの実践は「自ら課題を見つけ、見通しある計画を立て、深く考えて課題を解決するとともに、その課題解決への取り組みを自己評価し、改善できる」、つまり、「課題対応能力」につながるものである。 そこで、単元の導入時に教材・課題についての喚起のため、教材の疑問点をグループ討議で引き出し、それをさらにクラス発表し全体で共有するよう努めている。授業において一人のつぶやきにも似た小さな疑問であっても、本時の目標に取り入れ、その解決を目指している。この一連の授業への姿勢を醸成することは、生徒が主体的に授業に取り組もうとする姿勢を育むことにもつながる。 3 家庭や地域社会との連携など具体的な実践事例 本校では年に 3 回、生徒・保護者の当番と職員が一週間街頭に立ち、通学する生徒や地域の方々といさつを交わす「さわやか清陵運動」を実施している。これにより、「地域に愛される学校」「品位のある人間」づくりを学校関係者が一丸となって具現化しようとする意識の向上につながっている。 また、本校は、横手市、横手商工会議所、横手市観光協会と「四者連携」に関する協定を締結しており、積極的に地域のイベント等に参加し、学びの中で培ったアイデアや技術力を地域に生かしている。例えば、生徒が開発し実用新案を取得した「ミニミニかまくら」を使った地元 PR、本校の教育活動の特色である「探究」活動の一つであるまちおこしのカフェ経営、家庭クラブの「高校生による子育て支援プロジェクト」などがあげられる。このような地域社会と積極的に関わり課題を共有して問題解決にあたる過程で、生徒は自己有用感を抱きながらシティズンシップを醸成している。今後は、卒業生、保護者、多様な職業人などをゲストティーチャーとして招き、講演やディスカッションを通し、人間としての在り方生き方についての考えを深めさせる機会を計画的に実施する工夫が必要である。							

第1学年普通科 保健体育科学習指導案

指導者 神 谷 忠 昭

1 単元名 攻防の世界を広げよう！自分の得意な連絡技を身に付けよう！（武道 柔道）

2 目 標

- (1) 技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、得意技を身に付けることができるようにする。相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技、得意技や連絡技を用いて、相手を崩して投げたり、抑えたりするなどの攻防を展開することができるようにする。【技能】
- (2) 柔道に自主的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする。自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。【態度】
- (3) 伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古の仕方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。【知識、思考・判断】

3 生徒と単元

(1) 生徒について

男子22名、女子10名の学習集団である。このうち、横手清陵学院中学校からの生徒は19名と半数以上を占めており、中学校2年時に必修で柔道を学習している。

事前アンケートによると、中学校での柔道学習の経験は3年間を通して学習した生徒が11名おり、中学校3年生時に学習した生徒は14名いた。そのため、技能には個人差があるものの、ある程度の技能を身に付けている生徒たちである。学習内容については、礼法や進退動作などの伝統的な行動や受け身、投げ技や抑え込み技の基本となる技についてほとんどの生徒が学習したが、技の名称や技への入り方などについては、うまくできないという生徒が多かった。生徒がもっている柔道のイメージとしては、「相手を投げる」と「日本の伝統的な武道」に魅力を感じている生徒が32名中27名おり、我が国固有の文化としての柔道への興味や関心の高さがうかがえる。その反面、「けがをすることが怖い」と感じている生徒が20名おり、投げられる際の「怖さ」を払拭できるように、受け身をしっかりと身に付けることや、けがを事前に防止し、安全に学習できるような学習の場の工夫が必要であると考えられる。特に、近年部活動において「大外刈り」の練習中での事故が多発していることから、指導の際には十分な注意を払いたい。

技能に関しては、受け身や基本動作を学習してきたものの、確実な定着には至っていない生徒が多い。また、投げ技、固め技の基本となる技の習得についても個人によってばらつきがある。得意技や連絡技の習得にも十分に至っていない生徒が多い。

態度に関しては、体育の学習に自主的に取り組むことができる運動好きな生徒たちであり、柔道の学習においても自主的に取り組もうとしている生徒が多い。また、礼法を大切にしようとする姿勢もみられ、礼に始まり礼に終わるなどの伝統的な行動の仕方を自分の意志でできる生徒が多い。お互いに怪我をしないように相手のことを気遣い、安全面に配慮しながら活動しようとする場面がみられる反面、自由練習でお互いに攻防する場面で遠慮がちになり、攻防を楽しむ局面までつながらない場面も見られる。

知識、思考・判断に関しては、伝統的な考え方について、「精力善用」「自他共栄」の意味を理解しながら、学習に生かしたいと考えている生徒が多い。しかし、基本的な技の名称や行い方については十分に理解していない生徒が多い。課題解決に向けてグループの仲間に対して教え合ったり、よりよいアイデアを考えようとする雰囲気が見られ、自分だけでなくお互いの技を高めようとする様子が見られる。

(2) 単元（運動の一般的特性）について

柔道は、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。

高等学校入学年次では、中学校第3学年との接続を踏まえ、これまでの学習の定着を確実に図るようすることが求められている。

したがって、技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを深く味わいながら柔道の学習に自主的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にすることを単元を通して重視していきたい。また、自己の役割を自覚し、責任を果たすことなどに意欲をもち、健康や安全を確保しながら、柔道の伝統的な考え方や技の名称や見取り稽古の仕方、課題解決の方法などを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにして進めていきたい。

(3) 指導にあたって

単元において、「得意技や連絡技を使って攻防を楽しむ」ことを大きなねらいとした。このねらいに向けて、自己の体力や技能に応じて「得意な連絡技を身に付ける」ために、本時では「自己に適した連絡技を見付ける」ことをねらいに設定した。この達成に向けて、生徒たちはこれまで学習してきた受け身、崩し、体さばきなどの基本動作や基本となる技の十分な習熟を図るとともに、自己の技能・体力に応じた得意技を身に付けることが重要になってくる。また、中学校第3学年との接続を踏まえ、これまでの学習の定着を確実に図るために、段階的な指導を心がけて進めていきたい。

技能については、これまで学習してきた技を中心に、自己の技能・体力に応じた得意技を見付けてその技を中心に、得意な連絡技を見付けていくことができるように進めたい。その際に、「二つの技を同じ方向にかける技の連絡」と「二つの技を違う方向にかける技の連絡」に分類し、その動きの中で自分の得意技を生かせるようにしたい。それぞれの技の組み合わせの動きの中で、自分の施した技によって相手がどのように動くのか、反応するのかといったことを「崩し」や「体さばき」と関連づけて考えさせ、約束練習で実際の動きの中で試してみるなどの試行錯誤を繰り返しながら、自分に適した連絡技を見付けることができるように進めたい。

態度については、自己の課題解決に向け、グループ内の仲間との活発な意見交換をしながら、お互いに教え合い自主的に練習に取り組む場面を多く作っていきたい。そのためにも、効果的な見取り稽古や運動観察の方法など、相手の動きや技を見る具体的な視点についての理解を深めさせながら進めていきたい。また、グループ内での自己の役割をより明確にさせることで、責任のある行動の大切さに気付かせ、理解させるようにしたい。

知識については、それぞれの技の名称を技の系統性に関連づけながら指導するとともに、それぞれの技を効率的に掛けられる細かなポイントなども併せながら理解させたい。また、課題解決の方法をより効果的に理解させるためにも見取り稽古や運動観察の視点を具体的に提示しながら、課題解決に結びつく練習内容や方法の選択、実践につなげるようにしていきたい。

思考・判断については、自分の得意な連絡技を見付けるために最初は、幾つかの具体的な連絡技を提示しそれらを選択させるところから進めていきたい。その中で自分に適した連絡技を仲間との話合いや教え合いを通じながら見付け、その習得に有効な練習方法や技術的課題を自主的に解決しながら、最終的に得意な連絡技を身に付ける段階までつなげていきたい。そのためにも、運動観察や見取り稽古が大切になってくることも意識させながら進めていきたい。

キャリア教育の視点では、見取り稽古やグループ内での話合いの中で仲間の技の出来映えを評価したり課題を教え合ったりすることや、自分の技能・体力に応じた練習方法の選択や自分に適した技を見付けることで、コミュニケーションスキルや意志決定能力などのさらなる向上につなげていきたい。

5 本時の実際（１０／１５）

(1) ねらい

- ◎ 提供された連絡技での攻防の仕方から自己に適した攻防の仕方を選ぶことができるようにする。【思考・判断】
- 仲間の課題を指摘したり，課題解決のアイデアを伝え合ったりしながら協力して学習に取り組むことができるようにする。【態度】

(2) 学習過程

	学 習 活 動	形 態	習得と活用のための留意点	評 価
モチベーション	1 ウォーミングアップを行い，体を十分に動かす。 ・柔道ダンス	ペア	・仲間の健康や安全を確認し，これまでの復習をしながら心身の準備ができるように呼びかける。 ・体さばきや受け身など，基本動作をウォーミングアップの中に取り入れ，体を十分に動かすことができるようにする。	○ 仲間の課題を指摘したり，課題解決のアイデアを伝え合ったりしながら学習に取り組んでいる。 【態度】（観察） 受けの状態と【上手な連絡技のポイント】に着目させ，どのようなアドバイスが課題解決につながるのかを個別に説明する。
インプット	2 本時の学習の見通しをもつ。 3つの連絡技の中から自分に合った得意な連絡技を見付けよう	トリオ		
アウトプット	3 各自で選択した連絡技をトリオで練習する。 【3つの連絡技】 ・膝車→体落とし ・大内刈り→体落とし ・支え釣り込み足→大内刈り } この中から1つ選択するようにする (1) 技の形やポイントを確認するための約束練習を行う。 ・取，受，観察を一定時間で交代しながら行う。 (2) 選択した連絡技の課題を【上手な連絡技のポイント】を活用しながら，トリオで確認する。 (3) 受けの動きを加えた約束練習を行う。 (4) 選択した連絡技のみの自由練習を行う。 (5) 自由練習での課題についてトリオで話し合う。	トリオ	・「知識の理解・習得－演示－観察－発問－相互作用」の流れをもとに生徒同士が互いに技のポイントを教え合いながら練習できるように，3人1組のトリオを活用した学習に取り組む。 【上手な連絡技のポイント】 ①手足の動きがしっかりとできているか ②スムーズに技をつなげられているか ③正しい方向に受を投げるができるか ④受が正しく受け身をとれているか ・トリオの役割は「取」「受」「観察」であることを確認する。 ・「受」は，受けの姿勢も技を身に付ける重要な要素であることに気付かせながら，取が技を連絡しやすいようにしてあげることをアドバイスする。 ・「観察」は，取の出来映えの観察や周囲の安全確認を行うとともに，上手な連絡技のポイントを視点にお互いにアドバイスし合うように指示する。 ・「取」は，あらかじめ自分の課題や見て欲しいポイントをトリオの仲間に教えることでより具体的な課題解決のアイデアにつながることを確認し合う。 ・活動→話し合い→活動という流れを基本にし，トリオで関わり合いながら課題解決に取り組めるように支援する。	
フィードバック	4 本時の振り返りをする。 (1) 学習カードに記入する。 (2) 連絡技を発表し，本時の成果について確認する。	個	・本時の学習によって見付けた連絡技を発表し，個々の課題等に気付かせながら共有化を図る。	◎ 提供された連絡技での攻防の仕方から自己に適した攻防の仕方を選んでいる。 【思考・判断】（学習カード） 学習カードに記入した「連絡技を選んだ理由」を再度確認させながら，自分に合った攻防の仕方について仲間の動きも参考にするよう助言する。

※下線はキャリア教育と関連のある内容

4 指導と評価の計画（15時間）

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	⑩	11	12	13	14	15
学習の段階		学習の見通しがもてるようにする。	基本的な内容の確認ができるようにする。			基本的な技を確実に身に付けることができるようにする。			投げ技や固め技の得意技や連絡技を身に付けることができるようにする。						得意技や連絡技を使って攻防を楽しむことができるようにする。	
学習の流れ		オリエンテーション ○単元の目標を知る。 ○学習の進め方を知る。 ○グループ編成を行う。 ※体格や体力を考慮 ※経験者の確認 ○柔道の伝統的な考え方について	○礼法，安全確認，健康観察，準備運動，補助運動，学習内容の確認													
			○受け身 ・後ろ受け身 ・横受け身 ・前回り受け身 ※受け身の3要素について ○投げ技の基本動作 ・姿勢と組み方 ・進退動作	○崩し，体さばきと関連させた受け身 ○伝統的な行動の仕方について ○安全な学習の進め方について	○崩し，体さばきと関連させた受け身 ○固め技の学習 約束練習↔自由練習	○連絡技の学習Ⅰ 〔抑え技→抑え技〕 約束練習↔自由練習			○固め技の攻防 ○自由練習			○投げ技の得意技や連絡技を高める ・自己の技能・体力に応じて投げ技の練習計画の立案			○かかり練習 ○約束練習	
		○簡単な試合 ・試合の行い方 ・審判法とルール														
		○本時のまとめ，振り返り，次時の課題の確認，礼法														
指導内容	態度	①伝統的な行動の仕方を所作として単に守るだけでなく，礼に始まり礼に終わるなどの伝統的な行動の仕方を自らの意志で大切にしようとする。		②けがや事故につながらないように畳の状態などを整えたり，柔道場の状況に応じて安全対策を講じたりして，自己や仲間の健康・安全を保持したりすること。		③技を高め，勝敗を競う楽しさや喜びを味わいながら得意技を身に付けることに自主的に取り組もうとすること。			④練習相手を引き受けたり，仲間の動きを観察するなど，課題解決に向け互いに助け合い教え合いながら練習に取り組もうとすること。						⑤練習や簡単な試合において自己の責任を果たすことは，活動時間の確保や自主的な学習を成立させる上で大切であること。	
	思考判断				③抑え込み技の応じ方について仲間に対して指摘し，教え合うこと。			①自己の技能・体力に応じた得意技を見付けること。			②提供された連絡技の方法から，自己に適した方法を選ぶこと。		③試合に向けて，技術的な課題や有効な練習方法の選択について仲間に対して指摘すること。	④健康や安全を確保するために，体調に応じて適切な練習方法を選ぶこと。		⑤柔道を継続して楽しむための自己に適したかわり方を見付けること。
	技能		①相手の動きの変化に応じた進退動作や体さばきをすること。	①相手の投げ技に応じて横受け身，後ろ受け身をとること。			②基本となる技を用いて安定した姿勢で投げたり，抑えたりすること。		③自己の技能や体力の程度に応じた得意技を用いて相手の動きの変化に応じた攻防をすること。			④相手の防御や動きの変化に応じて効率よく連絡技を用いて攻防すること。				
	知識	①我が国固有の文化である武道を学習することは，これからの国際社会で生きていく上で有意義であること。				②技には名称があることや，見取り稽古は，相手との距離の取り方や技をかける機会やかけ方を学ぶために有効な方法であること。			③自己の動きや仲間の動き方を分析するには，自己観察や他者観察などの運動観察の方法があること。			④柔道では主として瞬発力，筋持久力，巧緻性などが強く影響し，攻防と関連させた補助運動や部分練習を行うことで体力を高めることができること。				⑤簡単な試合におけるルールや審判や運営の仕方があること。
評価機会	関	① ← →	②	③ ← →	④ ← →	⑤ ← →										
	思		③ ☆	① ☆	② ☆	③ ☆	④ ☆	⑤ ☆								
	技	①	①	②	③	④ ← →										
	知	① ☆		② ☆	③ ☆	④ ☆	⑤ ☆									

○指導の機会

← → 観察評価期間

☆学習カード等による評価

学習活動に即した評価規準

運動への関心・意欲・態度

①練習や試合における相手への礼をするなど，相手を尊重し，礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとしている。
②用具や施設を整え，活動の方向や練習の場の安全など，健康・安全を確保している。
③技を高め，得意技を身に付けることに自主的に取り組もうとしている。
④課題解決に向け，仲間の課題を指摘したり，課題解決のアイデアを伝え合ったりしながら，互いに助け合い教え合いながら練習に取り組もうとしている。
⑤グループ内での自己の役割を自覚し，責任を果たそうとしている。

運動についての思考・判断

①自己の技能・体力に応じた得意技を見付けている。
②提供された攻防の仕方から，自己に適した攻防の仕方を選んでいる。
③これまで学習した知識を生かして，仲間に対して，技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。
④健康や安全を確保するために，体調に応じて適切な練習方法を選んでいる。
⑤柔道を継続して楽しむための自己に適したかわり方を見つけている。

運動の技能

①相手の動きの変化に応じた基本動作や投げ技に応じた受け身をとることができる。
②相手の動きに応じて，基本となる技で投げたり，抑えたりすることができる。
③自己の技能や体力の程度に応じた得意技を用いて投げたり抑えたりするなどの攻防ができる。
④相手の動きの変化に応じて，連絡技を用いて投げたり，抑えたりするなどの攻防を展開することができる。

運動についての知識・理解

①柔道の伝統的な考え方について，理解したことを言ったり書き出したりしている。
②技の名称や見取り稽古の仕方について，学習した具体例を挙げている。
③運動観察の方法について，理解したことを言ったり書き出したりしている。
④柔道に関連した体力の高め方について，学習した具体例を挙げている。
⑤簡単な試合におけるルールや審判の仕方など，試合の行い方について，学習した具体例を挙げている。

(丸数字は入学年次)

第35回秋田県学校体育研究大会横手大会「公開授業を終えて」

秋田県立横手清陵学院高等学校 神谷 忠昭

1 授業の概要

対 象：高校1年生（男子22名 女子10名）

単元名：攻防の世界を広げよう！自分の得意な連絡技を身に付けよう！（武道 柔道）

時 数：15時間計画の10時間目

2 授業のねらいに向けて

第1学年の単元においての大きなねらいは「得意技や連絡技を使って攻防を楽しむ」ことであった。このねらいに向けて得意技や連絡技を「身に付ける」ことが前提となるが、まず自分の技能や体力に応じた連絡技を「見付ける」ことが必要である。この「見付ける」ことを本時の大きなねらいとした。

これまで、このねらいに向けて生徒たちは個人や男女の技能差はあるものの、投げの形や崩しの方向、体さばきなどの基本動作や基本となる技のポイントを知識と技能の両方の面からある程度、身に付けてくることができた。

それに併せて、見取り稽古や運動観察の方法を知識として理解し、それらの知識を利用しながら、仲間の技のかけ方や間合い、タイミング、動きなどを見てその仲間たちにアドバイスしたり、自分の技を身に付けるために生かしていこうとしたりする姿勢も身に付けてくることができたと思う。

このように、これまでの学習の内容を「習得」の部分として捉え、今回の授業では「得意な連絡技を見付ける」ために、評価規準の思考・判断「提供された攻防の仕方から、自己に適した攻防の仕方を選んでいく」という「活用」に繋げていくと共に、連絡技を見付けるために、関心・意欲・態度「仲間の課題を指摘したり、アイディアを伝え合ったりしながら練習に取り組む」ことをねらいに授業を進めた。

3 授業での取り組み

ねらいに向けて授業の中で取り組んだいくつかの点を挙げたいと思う。

まず1つは準備運動で「柔道ダンス」を取り入れたことだ。音楽に合わせて生徒自身の健康・安全確認やこれまでの学習内容の復習を運動に取り入れることで、導入の段階で生徒たちが楽しい雰囲気の中でこれまでの復習をしながら本時の学習に入っていくことができた。

2つめにトリオ学習を取り入れたことである。3人一組のグループを作り、それぞれに「取」「受」「観察」の役割を持たせることで生徒同士が互いに技の出来映えやポイントを教え合いながら練習に取り組み、また安全確保も併せて活動することができた。これにより、課題解決に向けスムーズに話し合いに入っていくことができたと感じた。

3つめに「3つの連絡技から1つを選択させた」ということだ。これら3つの連絡技には、全部で4つの投げ技が含まれている。この投げ技はこれまでの既習技の中でも生徒た



ちが比較的安定して投げることができた技であった。これらを組み合わせた連絡技なので、上手くできない生徒でも、「これならできる」というものを見付け易く、アドバイスのやりとりもお互いに技のポイントを理解しながら進めることができたのではないかと思う。

4つめに、選択した連絡技は自分にとって得意であるかどうかを見極めさせる判断材料として、【上手な連絡技のポイント】という、4つの視点を提示したことである。これらを提示したことで、生徒どうしがお互いの連絡技を観察する上で少なくともこれらのポイントを押さえることにより、その連絡技が自分にあるかどうかを判断しやすくなったのではないかと思う。また、学習カードの中で「なぜ、その連絡技を選んだのか」という設問をし、自分が選択した連絡技についての理由を記入させることで評価判断の手立てとした。そこでも生徒が連絡技を選択する際の視点を見付け易くできたと思う。例えば、ねらいが「得意な連絡技を見付ける」ということなので、「その連絡技をかけたらスムーズに投げることができた」「手の動かし方や足運びが自分に向いていた」などの回答を想定し、そのような記述があればその生徒は今回の授業のねらいをクリアできたのだという評価につなげることができた。

4 授業での生徒の様子

授業では、生徒たちが積極的に課題解決に向けて話し合う場面やこうしたら上手くいくのではと、身振り手振りで動きを交えて教え合っている場面が多く見られ、積極的に活動しようとする姿がみられた。また、学習カードの中でも自分に合った連絡技は具体的にどのような点が自分にあるのかを考えることができた。しかし、生徒一人一人の技能の面からみると、まだまだ技の崩しや体さばき、そして「受」と「取」の理合いなどがよく理解されないために、



連絡技が上手にいかない生徒も多く見られたので、これらを含めたより深い技能習得について、今後の学習のねらいに位置づけて取り組んでいきたいと考えている。また、今回見付けた連絡技からより枠を広げ、自分の得意技をさらに活かせる有効な連絡技を多く見いだせるように発展させるとともに、自分にあった練習計画を立て、その練習の中で自分に合った連絡技を身に付けていけるようにしていきたい。

5 終わりに

今年度から本校に赴任し、まだ生徒の実態すらよく理解していないまま、この研究大会の授業準備を進めることになり、当初は不安という気持ちしかなかったが、授業準備に向けて指導主事の佐藤秀敏先生や船山育士先生をはじめ、多くの先生方から、大変貴重なご指導やアドバイスをたくさんしていただき、無事に授業を終えることができた。諸先生からのご指導は、私自身大いに勉強になり、今後の体育授業を行う上での財産とすることができたと感じている。この研究授業の経験を踏まえ、より充実した体育授業づくりに取り組んでいきたい。ご指導ご助言いただいた先生方に対して、この場をお借りしてお礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

4 年次研修の記録

(1) 高等学校5年経験者研修

渡辺 真

高等学校教職 5 年経験者研修を終えて

総合技術科環境工学類
教諭 渡辺 真

【 はじめに 】

本校で採用となりはや 5 年が経過し、これまで多くのことを経験し学ばせていただいた。振り返るとあっという間の 5 年間であった。中高一貫校のため、高校生のみならず中学生にも授業をする機会があることや、一年間だけではあったが中学校一年生の担任も経験させていただいた。今後の教職人生を考えても、二度とない貴重な経験をさせていただいた。

今年度、教職 5 年経験者研修に該当し、教育センターでの研修を中心に多くの研修に参加させていただいた。これまで様々なことを経験したつもりでいたが、この教職 5 年経験者研修を受講し、まだまだ自分の未熟さを痛感した。この研修の内容と感想について述べたい。

【 研修項目および感想 】

I 期 6 月 15 日（水） 秋田県総合教育センター

○日程

10:00～12:00 〈講義・演習〉「生徒理解と人間関係づくり」

13:00～16:15 〈講義・協議・演習〉「これからの高等学校に求められる授業改善①」

○「生徒理解と人間関係づくり」

生徒理解のためには行動の目的を踏まえた対応が重要であるとの話が印象的であった。生徒が起こす問題行動の原因には、「周囲から認めてもらいたい」、「教師より強い存在になりたい」、「強く指導する相手の心を傷付けたい」、「相手の指導を断念させたい」、などといった感情が起因しているとのことであった。生徒を取り巻く環境も大きく変化しているなかで、教師がすべきことはアンテナを高くし生徒の変化に敏感に反応することであると思う。また、そういった行動を未然に防ぐために、生徒に対し自己存在感を持たせるなど、人間関係をつくる取り組みを行う必要があると感じた。人間関係づくりのためのグループ・エンカウンターやアサーショントレーニングなども体験した。年度当初など、人間関係を構築すべきときなどに実践したいと感じた。

○「これからの高等学校に求められる授業改善①」

授業改善のポイントとして「アクティブ・ラーニング」が挙げられた。現行課程でも、知識や言語活動の充実が求められているが、社会の変化が激しいなか、生徒の主体的な学習態度を育てることがより強く求められている。これまで見られた教師側からの一方的な授業ではなく、生徒が主体的・能動的に活動できる授業とすることが重要であるとのことであった。現在、総合技術科の担任を務めさせてもらっているが、卒業後の進路として就職を希望している生徒が大半である。社会に出てからは、主体性がより一層強く求められる。この学習法を意識して取り組み、時代に即した学力の育成に努めていきたい。

○日程

10:00～12:00 〈講義・演習〉「教師が使えるカウンセリングの技法」

13:00～15:00 〈講義・協議・演習〉「これからの高等学校に求められる授業改善②」

15:10～16:15 〈講義・演習〉「学校教育目標とホームルーム経営」

○「教師が使えるカウンセリングの技法」

教育相談に関する講義のなかで、相談に当たっては教師が生徒との関係性のポジションを変化させることが重要であるという話が印象的であった。ワンアップポジション（教師が一段上の立場）ではなく、ワンダウンポジション（教師が一段下の立場）で、教師のききたいことではなく、生徒の言いたいこと心で「聴く」ということが重要であるとのことであった。夏休み明けは心身の変化が見られる時期であり、特に注意が必要である。生徒の変化に敏感に反応し、生徒の話を心で聴ける教師でありたいと感じた。

○「これからの高等学校求められる授業改善②」

この研修では、受講者が自校で撮影してきた授業を見ながら協議・演習を行った。協議は付箋を用いたワークショップ形式で行われた。様々なご指摘をいただいたが、指導主事の大山先生から授業の展開に関することや発問の仕方についてご指導・ご助言をいただいた。生徒が考える場面で十分な時間が確保されていないのご指摘であった。原因として、普段授業をしているなかでの「慣れ」が挙げられる。教師側からの一方的な授業であったのかもしれないと反省をした。ご指導いただいたことを今後の授業で実践していきたい。

○「学校教育目標とホームルーム経営」

学級経営においては、「目標設定」が重要であるとのことであった。学級の現状を正確に捉え、日々改善をしていくことが経営を円滑に進めるポイントになる。そのためには、学期ごとの評価を有効に活用することが重要である。民間の企業では広く取り入れられている、マネジメントサイクル（PDCAサイクル）が効果的であり、ぜひ活用したいと感じた。年度当初に計画を立てるが、それを客観的に分析することを忘れがちになっている。学期ごとに分析をし、それが次学期に生かされた学級経営となるようにしていきたい。

【 おわりに 】

この研修を終え一番感じたことは、初心を忘れてはならないということである。初任者研修からたった5年しか経過していないが、採用になったころの気持ちが薄れてしまっていたように感じる。もう一度原点に立ち返り、生徒のために何をしなければならないのか考え、生徒が寄り添える教師となるよう日々精進していきたい。

この研修を受講するに当たり、多くの先生方にご指導・ご助言をいただき感謝している。今後ともこれまで以上に多くの経験を積み、より成長できるよう努めていきたい。

編 集 後 記

「平成２８年度研究紀要第１２号」の発刊にあたり、校務御多忙の中、貴重な原稿をお寄せ下さった先生方に、深く感謝申し上げます。

この研究紀要が今後の先生方の研修等に、少しでもお役に立てれば幸いです。

研修・国際部

平成２８年度 研 究 紀 要

第 １ ２ 号

発行 秋田県立横手清陵学院 中学校・高等学校
秋田県横手市大沢字前田１４７番地の１
電 話 ０１８２－３５－４０３３
ＦＡＸ ０１８２－３５－４０３４